1973年9月25日発行
共産主義者同盟(RG)
第13号　100円　発行人　野村　忠

赤報

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く揚げ、国際非合法党を建設せよ！

＜本号目次＞
■スターリン主義に屈服した革共同革マル派の戦術の批判（上）……1～3面
■同志竹谷との通信……4～5面
■意見陳述……竹谷俊一……6～7面
■7・20日航機H・J闘争とアラブ赤軍に対する我々の態度……8面

スターリン主義に屈服した
革共同革マル派の戦術の批判（上）

はじめに

我々はすでに「共産主義」15号で革マル派の哲学の批判、資本主義批判の批判を行い、この間、革マル派の党組織論の批判を行ってきた。革マル派の党組織論の批判はいまだ未完であり、今後の「赤報」紙上で継続して行われるであろう。ここでは、本来は革マル派の党組織論の批判を終えてから掲載する予定であった革マル派の戦術に対する批判を述べる。

最近は宇野経済学のとり入れを行ってはいても、革マル派の思想の根本にあるのは西田・梯哲学の核心である「無の弁証法」を継承した黒田哲学（労働力商品化論と自覚の論理）である。この理論が日本の反スターリン主義運動の歴史の一時期において、スターリン主義哲学における客観主義を暴露するという意味において、一定の進歩的役割を果したことは、宇野経済学が経済学の領域において、トロッキーが政治理論と階級闘争の領域においてそれぞれの役割を果したのと同様である。だが特に一九六七年十・八羽田闘争を境として、一九六九年東大闘争以降は決定的に、革マル派は日本共産党とは逆に反スターリン主義の側から社会帝国主義に転化した。現在では我々は革マル派を社会帝国主義の一潮流として暴露し、弾劾する観点からのみ、この政党に対して述べることができる。革マル派は日本共産党の民主連合政府樹立―革新統一戦線論の知べ（注）「共産主義」15号において我々は黒田哲学を人間主義と組合主義の結合、社民思想の人間主義の粉飾として批判している。この規定は、革マル派の哲学、資本主義批判として正しいが、それらを実践に移し、今日に至るまで日々反動化させてきた、現在の革マル派を政治的に規定する場合には、すでに社会帝国主義の一潮流に転化したものとして規定し、このロシヤ革命当時の労働者反対派の立場をひきついだ日和見主義を代表してきたのである。しかし、国際的な革命と反革命の対立が深化し、日本においても資本家階級と労働者階級の経済的利害の非和解性がますます明らかになり、今日では事情が異ってきている。革マル派の組合主義的、改良主義的実践の発化は、今日では過去とは質的に変化した醜悪な形をとってあらわれており、にもかかわらず彼等は、自らを「革命的マルクス主義」の継承者であり、前衛党であると主張することによって、黒田理論の中に含まれていた反動的傾向を全面開花させ、日本共産党とは逆に反スターリン主義の側から社会帝国主義に転化したのである。いまや、彼等は日本共産党にも劣らぬほどにプロレタリア独裁に対する恐怖を示しているのであってプロレタリアートの隊列の内部にあって死にもの狂いで革命戦争に反対し、敵対し反スターリン主義の名の下にプロレタリア独裁と共産主義革命に反対し、敵対する役割を買ってでている。彼等はこの反革命的役割を背負うことによってブルジョアジーにおもねり、労働組合や学生自治会の中での合法的な組織拡大の、「官許」を獲得しようとしているのである。

（注）「共産主義」15号において我々は黒田哲学を人間主義と組合主義の結合、社民思想の人間主義の粉飾として批判している。

「われわれの世界革命戦略、および革命的綱領的解明（II'a）は、直接には、第4インターナショナルの戦略論（IIa）を、変質した第四インターナショナルの戦略論（IIa'）を、変質した帝国主義・反スターリニズム＝反スターリニズムの反帝・労働者国家擁護」ではなくして、まさに八反革命戦略が「反帝・労働者国家擁護」ではなくして、まさに八反科学的分析にもとづいて、現代世界革命的共産主義運動の知べである」（「日本の反スタ運動II」253P）

「われわれの世界革命戦略、および革命的綱領的解明（II'a）は、直接には、第4インターナショナルの戦略論（IIa）を、変質した」（II'a）のみ、ほかならぬわれわれ日本革命的共産主義運動の知べである」（「日本の反スタ運動II」253P）

第一章　革マル派の世界革命論における民族共産主義

(1)　革マル派の反帝反スタ戦略と革命現実論

「レーニン死後の国際共産主義運動のこのような事態にかんするこの問題を規定している一国社会主義論およびこれからみちびかれた反帝・反スターリニズム＝反スターリニズムの革命論（IIa）の理論的粉砕を媒介としながら、批判的にうけつぎ、改作したものである」（「日本の反スタ運動II」254P）

革マル派は以上のように反帝反スタ戦略について述べている。革共同第一次分裂（一九五八年七月）及び第二次分裂（一九五九年八月）において、太田派、西派などが第四インターナショナルの枠内で「反帝・労働者国家無条件擁護」の戦略をそれぞれの立場で主張したのに対して、当時の探求派＝第二次分裂以降の革共同全国委員会は、「反帝・反スターリニズム」戦略を唱えたのであり、革共同第三次分裂（一九七二年秋）以降も反スタ戦略は第四インターナショナルを「のりこえる」ところの革マル派の独自性を示すものとされてきたのである。

反帝反スタ戦略といっても、革マル派と中核派とではいまや大きく違っており、革共同両派は双方とも反帝反スタを正当に継承したのは自分であると主張している。革マル派の場合は、その反帝反スタ戦略を「世界革命論（革命現実論）」なる形而上学の中に組み入れることによって美化しているのであって、我々は革マル派のこのような主張こそ反帝反スタ戦略の反動性を最もはっきりと示すものであり、中核派の最近の主張は、「ブンド主義的」手直しであると考えている。ともあれ、我々は今号では、この「革命現実論」の批判を、革マル派の論理にそって行う中で、革命的マルクス・レーニン主義のプロレタリア国際主義に関する原則を明らかにすることからはじめたいと思う。

革マル派の「世界革命論（革命現実論）」は、「革命現実論（革命本質論）」（これは、①戦略論②組織論③戦術論に分かれる）及び「組織現実論」（これは①党建設論②組織戦術論③闘争論に分かれる）とともに、「マルクス主義革命理論の構造」をなすものとされている。「本質論から現実論へ」という順序が存在論的展開の順序だが、革命理論の場合には、いまだ「理論的に体系化されていない」ので、「こうした世界革命の種々の現実論を論理的に歴史的に整序した」ことを基礎として、それに立脚しながら「革命本質論を革命現実論とし構成すること」のほうが現実的だし、実践的だなどと革マル派は理屈をこねまわしているが、要は、国際共産主義運動の経験と総括を行わなくてはならないということを言っているにすぎない。いつの日か革命理論が「理論的に体系化」されたなら、本質論から現実論へという「存在論的展開の順序」にそって「革命理論の構造」を組み立てたいものだなどという願望を前提としながら、マルクス、レーニンの世界革命論を「論理的・歴史的に整序」しようとする革マル派の試みは、革命的マルクスレーニン主義によって、すべての理論は世界を解釈するためにあるのではなく、世界を変革するためにあるのだということ、その哲学批判、経済学批判、政治理論のすべてが革命党の実践党派闘争と結びついており、革命党の綱領・組織・戦術に結晶すべきものだということを否定し、革命的マルクス・レーニン主義を修正している。この反動的な試みがどんな結論を生みだすかはおよそ明らかであるが、とまれ革マル派の「世界革命論（革命現実論）」の中味を検討してみよう。

（注）I　革マル派の「マルクス主義革命理論の構造」に関するお喋りは「日本の反スタ運動II」で整理されて行われている。以下しばらく、我々はこの本を主要に検討する。

（注）II、革マル派は哲学、経済学、国家論などと区別して「革命理論」という理論の領域が「革命実践論」としてあるのだと主張した上で「革命理論の構造」について語っている。この主張は①先にも述べた如く、革命的マルクスレーニン主義を、いくつかの理論に区分される一体系として、プルジョア科学と同じ次元で把握している点で合法マルクス主義の実を示している。更に②革命党の綱領、組織、戦術を革命理論＝政治理論に解消する誤りを犯している。そもそも革マル派は同じ「革命理論」だが、革命理論の場合には、いまだ「理論的に体系化されていない」ので、「こうした世界革命の種々の現実論を論理的に歴史的に整序すること」を基礎として、「革命本質論」を構成すること」が現実的だし、実践的だなどと革マル派は理屈をこねまわしているが、要は、国際共産主義運動の経験と総括を行わなくてはならないということを言っているにすぎない。いつの日か革命理論が「理論的に体系化」されたなら、本質論から現実論へという「存在論的展開の順序」にそって「革命理論の構造」を組み立てたいものだなどという願望を前提としながら、マルクス、レーニンの世界革命論を「論理的・歴史的に整序」しようとする革マル派の試みは、革命的マルクスレーニン主義によって、すべての理論は世界を解釈するためにあるのではなく、世界を変革するためにあるのだということ、その哲学批判、経済学批判、政治理論のすべてが革命党の実践党派闘争と結びついており、革命党の綱領・組織・戦術に結晶すべきものだということを否定し、革命的マルクス・レーニン主義を修正している。この反動的な試みがどんな結論を生みだすかはおよそ明らかであるが、とまれ革マル派の「世界革命論（革命現実論）」の中味を検討してみよう。

（注）I　革マル派の「マルクス主義革命理論の構造」に関するお喋りは「日本の反スタ運動II」で整理されて行われている。以下しばらく、我々はこの本を主要に検

共産主義16号　発売中・定価550円

（内容）
第一部　主張
当面する革命戦争の更なる発展のために
第二部　共産主義者同盟（RG）結成にむけての党内一党派闘争
第三部　連合赤軍との党派闘争
分派闘争と理論問題

論」という言葉でも、我々共産主義者同盟とは違った意味で使用し

(2) 革マル派の「世界革命論」（革命現実論）の枠組

彼等はまずマルクス・エンゲルスの「共産党宣言」「ドイツ・イデオロギー」などにおける世界革命について述べて次の様に言っている。

「この世界革命論（Ⅰa）は、資本制商品経済の段階的特徴性、その産業資本主義の段階的段階としての特殊性をそのうちに刻印されているとはいえ、プロレタリア世界革命の普遍的本質論としてとらえかえれ整序され再構成されるべき性格をもっている。資本制経済の特殊的段階をなすイギリス産業資本主義の法則性にふまえて、同時にその普遍的運動法則が、『資本論』として解明されたのと同様にマルクス・エンゲルスの世界革命論は、そのうちに産業資本主義の段階的特殊性を色濃くもっているとはいえ、同時に世界革命の普遍的本質論としての意義をもっているのである」（「日本の反スタ運動Ⅱ」246～247P）

要にレーニンの「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」トロッキーの「結果と展望」について述べて次の様に言っている。

「しかしとにかく、レーニンの労農民主独裁論やトロッキーの永続革命論（Ⅱb）はいずれも帝国主義的段階における後進国革命の理論という性格をもっている。このようなものとしてそれらは、世界革命の――帝国主義段階における――特殊的段階論（Ⅱa）とは区別されなければならない。産業資本主義の段階的特殊性を刻印されているところのマルクス・エンゲルスの世界革命論（Ⅰb）を普遍的本質的論として再構成すること（Ⅰa）を媒介としてはじめて、それはなしとげられるであろう。」（「日本の反スタ運動Ⅱ」251～252P）

このようなかたちで、マルクス・エンゲルス、レーニン・トロッキーの世界革命論の「再構成」の主張がなされたあと、第四インターの「過渡的綱領」及び「反帝勞働者国家無条件擁護」戦略を批判して、彼等の反帝反スタ戦略が導きだされたことが、第一節の冒頭に引用したようなかたちで主張され、結論として次のように述べられる。

「一方では、マルクス主義における革命理論を整備するためのこうした理論的要求、直接的には、プロレタリア世界革命の普遍的本質論としてとらえかえれ整序され再構成されるべき性格をもっている。資本制経済の特殊的段階をなすイギリス産業資本主義の法則性にふまえて、同時にその普遍的運動法則が、『資本論』として解明されたのと同様にマルクス・エンゲルスの世界革命論は、そのうちに産業資本主義の段階的特殊性を色濃くもっているとはいえ、同時に世界革命の普遍的本質論としての意義をもっているのである」（「日本の反スタ運動Ⅱ」253～254P）

以上が、革マル派の「世界革命論（革命現実論）」の大体の組織である。かいつまんでまとめれば①マルクス・エンゲルスの世界革命論を再構成することによって「世界革命の普遍的本質論」を導き出し、②、③を「適用」しつつ、レーニン・トロッキーの革命論を再構成することによって「世界革命の特殊的段階論」を導き出し、③、①、②を「適用」しつつ、反帝反スタ戦略の「解明」と現代世界の分析との「統一」を行うことによって、各国革命戦略論＝「世界革命の個別的現実論」を導き出そうというのである。

ここで注意しておかなくてはならないことは、革マル派にとっては綱領＝戦略なのであって、綱領の原則的部分として資本主義批判が具体化されなくてはならないことなど、全く関係がないことである。何故なら、彼らの資本主義批判とはプロレタリアの自覚の論理であり、したがって哲学＝主体性論でしかないからである。

だから彼らの「革命理論の構造」は、世界革命論（革命現実論）――組織現実論という、結局のところ「戦略」を中心にした枠組になってしまっている。彼らの革命実践論（革命本質論）なるものも、党の綱領、組織、戦術について述べられるのでなく、①戦略論、②組織論、③戦術論として述べられていること。彼ら自身、綱領について次のように言っている。

「一般に『綱領』とは世界革命、これを実現する過程にかかわる実体的および現実的な指規定、あるいは戦略とこれを実現するための目的および手段にかんする理論体系、それを本質的に表現したものなのである。」（「日本の反スタ運動Ⅱ」254P）

このような綱領に対する革マル派の態度は、現在の八派系諸派にも共通するものであり、第二次共産主義者同盟にも存在していたものであるが、革命党の資本主義に対する批判をあいまいにし、共産主義革命の原則をあいまいにした上で、革命の過程を描き出そうとする動きである。第二次共産主義者同盟は危機論としての戦略を忠実に実践に移すことによって、軍事問題に突きあたり、7・6事件以来の分派闘争を経て、我々共産主義者同盟（RG）による第六の共産主義者同盟（BL）の大体の組成（名の下に切り刻み、修正する結果に至らざるをえないし、実際に至っていること。③平野三段階論を、資本＝賃労働関係を価値関係と見るところの、ブルジョアイデオロギーに屈服した、価値論による原理論の構築として、マルクス「資本論」を修正し、更にこの原理論の枠内に帝国主義段階論をうんぬんメルクス・レーニン主義を修正したものなのであり、宇野三段階論を認めること自身がそもそも誤っていること。まして、宇野三段階論から類推して革命理論について考えようとする革マル派の反動性は明らかであること。革マル派は宇野三段階論を認め、宇野学派のマルクス・レーニン主義に対する批判（例えば、筑辺賓「レーニンの農業理論」）を黒田哲学と折衷させつつとり入れることによってマルクス・レーニン主義を修正し歪曲していることは等々である。

革命理論＝政治理論の領域はかりではなく、哲学批判、経済学批判、その他すべての分野において、マルクス・レーニン主義の発展はそれに対して根本的に敵対的なものであり、あるいはマルクス・レーニン主義の名前をかぶった様々の修正主義との闘争を経て、たたかいとられてきた。その発展は国際共産主義運動の血のにじむような経験の中で勝ちとられてきたものである。

スターリンは「レーニン主義は帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である」（「レーニン主義の基礎」）と規定しているとおりレーニン主義の教科書を作ろうとすることによって、マルクス・レーニン主義を修正したが、革マル派はスターリン以下のスコラ学を唱えることによって、マルクス・レーニン主義を全く駄目にし、修正しているのである。このような革命理論の形而上学化の試みに対しては、それが形而上学であることを指摘しただけでは根底的な批判にはならず、革マル派がどのようにマルクス・レーニン主義の革命理論の内容を修正しているかを明らかにすることによって、はじめて根本的に粉砕できる。だから我々は次に彼等によるマルクス・世界革命論の修正の中味を検討していこう。

（注）ここまで述べてきたことからすでに明らかなように、第二次共産主義者同盟において、「理論戦線」八号日向論文「革命方法論」の早大社学同を中心とした部分の革マル派に対する理論的屈服を示すもの以外の何物でもなかった。

「赤軍」4号における塩見君の革命方法論なるものも、革マル派ブックスを示していた。九回大会以降の第二次ブンドの党内闘争において、日向論文で行われた、理戦八号論文の更なる改悪に対する我々の批判は「烽火」再刊1号及び「共産主義」14号で行われている。これらの中で、「烽火」再刊1号は、筑辺賓「レーニンの農業理論」を黒田哲学と折衷させつつとり入れることによって革マル派の反動性を暴露している。

（注）ここまで述べてきたことからすでに明らかなように、第二次共産主義者同盟において、「理論戦線」八号日向論文「革命方法論」の主体的立場の解明」は、当時の革マル派に対する理論的屈服を示すものであり、革マル派がどのように「主体的立場の解明」を唱えようとしたのか、若きマルクス・エンゲルスであった。すなわち一方で「プルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上最初は民族的である。いずれの国のプロレタリアートも当然まず自国のプロレタリアートでなければならない。」（「共産党宣言」）というように、各国プロレタリア革命の民族的＝国際的な推進構造が彼らによって明らかにされた。それとともに他方では、資本主義の産業資本主義的段階の社会的現実にふまえ、――つまり一方における「プロレタリアの生産諸力の巨大な世界史的発展ならびに世界市場の形成、他方における世界史的普遍的な経済的存在としてのプロレタリアートの創造ということを物質的基礎とし――、その現実認識にもとずいて、実現されるべき世界革命の「一挙に、あるいは同時的に」という性格を、その「永遠的」完遂という性格を、その「永遠的」完成という性格を、その「現実的」性格を、「プロレタリアの自己解放」の「共産主義」の「実現」であるとして明らかにしたのであった。前者は各国革命のプロレタリアの主体的推進構造の解明であり、そして後者はプロレタリア世界革命の一環として、「プロレタリアの自己解放」という普遍的問題を、インターナショナリズムにもとずいて個別的に実現すること」と述べているだけである。インターナショナリズムという言葉のみを百遍繰り返しても、それだけでは何の免罪にもならない。

(3) プロレタリア国際主義からの背教

革マル派はマルクス・エンゲルスの「世界革命論」について次の様に言っている。

「いうまでもなく、各国プロレタリア革命の永遠的完遂、その国際革命への連続的波及、という世界革命のこの有機的構造を、産業資本主義的段階の政治経済構造にふまえて本質論的に明らかにしようとしたのが、若きマルクス・エンゲルスであった。すなわち一方で『プルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上最初は民族的である。いずれの国のプロレタリアートも当然まず自国のプロレタリアートでなければならない。』（「共産党宣言」）というように、各国プロレタリア革命の民族的＝国際的な推進構造が彼らによって明らかにされた。それとともに他方では、資本主義の産業資本主義的段階の社会的現実にふまえ、――つまり一方における「プロレタリアの生産諸力の巨大な世界史的発展ならびに世界市場の形成、他方における世界史的普遍的な経済的存在としてのプロレタリアートの創造ということを物質的基礎とし――、その現実認識にもとずいて、実現されるべき世界革命の「一挙に、あるいは同時的に」という性格を、その「永遠的」完遂という性格を、その「現実的」性格を、「プロレタリアの自己解放」の「共産主義」の「実現」であるとして明らかにしたのであった。前者は各国革命のプロレタリアの主体的推進構造の解明であり、そして後者はプロレタリア世界革命の一環として、各国プロレタリアートの共産主義的実現」を唱え、「インターナショナルを主体的および実体的現実的な適用」との統一において、しかもインターナショナルを主体的および実体的根拠として、普遍的に実現すること、つまり各国革命の普遍的＝個別的実現――にほかならない。」（「日本の反スタ――リン主義運動Ⅱ」255～256P）

ここで、革マル派は、「共産党宣言」の「プルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。いずれの国のプロレタリアートも、当然まず自国のプロレタリアートでなければならない。」という箇所を、明らかに歪曲し、修正している。「各国革命の普遍的＝個別的実現」を唱え、「インターナショナルを主体的および実体的根拠」とすることを唱えてはいても革マル派は実際はインターナショナル＝世界党を神棚に祭り上げてしまっていることを言っている。世界党について語ろうとするなら、当然にもプロレタリア国際主義＝インターナショナリズムの内実が語られなくてはならないが、革マル派はいつ「プロレタリア階級の自己解放」という普遍的問題を、インターナショナリズムにもとずいて個別的に実現すること」と述べているだけである。インターナショナリズムという言葉のみを百遍繰り返しても、それだけでは何の免罪にもならない。

マルクスが「その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。」という箇所で、「共産党宣言」の他の箇所で具体的に明らかにされており、プロレタリアートの国際的利益、プロレタリアートの国際的統一は何かが具体的に述べられている。ところが革マル派はそれらの部分については何も触れずに「普遍本質論」を語っているのであり、プロレタリア国際主義の中味を抜いて言葉だけにすることによって、結局、最初は民族的」のみを強調し、民族共産主義に転落しているのである。革マル派の「普遍本質論」には彼らにとって都合の良いことなら、どんなテマでもつめこむことができるというわけである。普遍本質論に関するつじつまあわせは革マル派にまかせておけばよいが、このような子供だましの「哲学」で、プロレタリア国際主義を歪め、マルクス・レーニン主義を修正する試みは見逃すわけにはいかない。ちなみに、日本共産党もまた、第二次共産主義者同盟の世界同時革命論に対して「共産党宣言」の「最初は民族的」の箇所を引用して、「国社会主義論を難難して、日本共産党、革マル派のこのようなマルクス・レーニン主義の修正と闘争し革命的マルクス・レーニン主義の原則を復権させなくてはならない。

「共産党宣言」は次の様に述べている。

「プロレタリアートの生活条件はすでに破壊されている。プロレタリアは無所有である。彼の妻子にたいする関係には、ブルジョアの家族関係と共通するものはもはやなにもない。近代的工業労働、資本への近代的隷属は、イギリスでもフランスでも、またアメリカでもドイツでも、プロレタリアからすべての民族的な特徴をはぎとった。法、道徳、宗教は、プロレタリアにとっては、そのいずれも、背後にブルジョアの利益をかくしもったブルジョアの偏見である。」（国民文庫版「共産党宣言」41P）

このようにプロレタリア国際主義は、プロレタリアートの経済的地位、生活条件が、国際的に同じものであり、ブルジョア社会が発展するにつれて、ますますそうならざるをえないということに根ざしたプロレタリアートの階級闘争の原則である。

「労働者は祖国をもたない。彼らがもたないものを、それからとりもたなければならない。プロレタリアートは、ますもって政治支配をかちとって、民族的階級にみずからをたかめ、自分自身を民族として組織しなければならないという点では、ブルジョアジーの意味とはまったくちがうとはいえ、プロレタリアート自身やはり民族的である。」（同52P）

「ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。」と「宣言」の一つ一つ言われている意味は、プロレタリアートが、まず自国のブルジョアジーを打倒し、プロレタリア独裁（「宣言」では「プロレタリアートを支配階級にたかめること、民主主義をたたかいとること」とされている）を樹立しなくてはならないという点では、プロレタリアート革命は、形式的には民族的だということなのであり、一内容からではないが」というのは、プロレタリアートは祖国をもたない階級であって、プロレタリアートの国際的な階級としての利益、プロレタリアートの国際的統一のための利益こそ優先されなくてはならないとし、各国のプロレタリア独裁権力も、そのようなものとして、世界共産主義革命の砦として敵改されなくてはならないことを述べているのである。

「諸国民の国家的な分離と対立とは、ブルジョアジーの発展につれて、商業の自由や、世界市場や工業生産とともに対応する生活関係の一様化につれて、すでにしだいに消滅しつつある。

プロレタリアートの支配はますますこれを消滅させるであろう。すくなくとも文明諸国の共同行動が、プロレタリアートの解放の第一条件の一つである。

一個人が他の個人を搾取することは、プロレタリアートの敵対的な闘争の一つである。

このようにプロレタリア国際主義は、プロレタリアートの経済的地位、生活条件が、国際的に同じものであり、ブルジョア社会が発展するにつれて、ますますそうならざるをえないということに根ざしたプロレタリアートの階級闘争の原則である。

「労働者は祖国をもたない。彼らがもたないものを、それからとりもたなければならない。プロレタリアートは、ますもって政治支配をかちとって、民族的階級にみずからをたかめ、自分自身を民族として組織しなければならないという点では、ブルジョアジーの意味とはまったくちがうとはいえ、プロレタリアート自身やはり民族的である。」（同52P）

「ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。」と「宣言」の一つ一つ言われている意味は、プロレタリアートが、まず自国のブルジョアジーを打倒し、プロレタリア独裁（「宣言」では「プロレタリアートを支配階級にたかめること、民主主義をたたかいとること」とされている）を樹立しなくてはならないという点では、プロレタリア革命は、形式的には民族的だということなのであり、一内容からではないが」というのは、プロレタリアートは祖国をもたない階級であって、プロレタリアートの国際的な階級としての利益、プロレタリアートの国際的統一のための利益こそ優先されなくてはならないとし、各国のプロレタリア独裁権力も、そのようなものとして、世界共産主義革命の砦として敵改されなくてはならないことを述べているのである。

「諸国民の国家的な分離と対立とは、ブルジョアジーの発展につれて、商業の自由や、世界市場や工業生産とともに対応する生活関係の一様化につれて、すでにしだいに消滅しつつある。

プロレタリアートの支配はますますこれを消滅させるであろう。すくなくとも文明諸国の共同行動が、プロレタリアートの解放の第一条件の一つである。

一個人が他の個人を搾取することは、プロレタリアートの敵対的な闘争の一つである。

ていることに注意されたい。〉

は、世界革命論（革命現実論）――組織現実論という、結局のところ「戦略」を中心にした枠組になってしまっている〈彼らの革命実践論（革命本質論）なるものも、党の綱領、組織、戦術について述べられるのでなく、①戦略論、②組織論、③戦術論として述べられていること〉。彼ら自身、綱領について次のように言っている。

「一般に『綱領』とは世界革命、これを実現する過程にかかわる実体的および現実的な指規定、あるいは戦略とこれを実現するための目的および手段にかんする理論体系、それを本質的に表現したものなのである。」（「日本の反スタ運動Ⅱ」254P）

このような綱領に対する革マル派の態度は、現在の八派系諸派にも共通するものであり、第二次共産主義者同盟にも存在していたものであるが、革命党の資本主義に対する批判をあいまいにし、共産主義革命の原則をあいまいにした上で、革命の過程を描き出そうとする動きである。第二次共産主義者同盟は危機論としての戦略を忠実に実践に移すことによって、軍事問題に突きあたり、7・6事件以来の分派闘争を経て、我々共産主義者同盟（RG）による第六の共産主義者同盟（BL）の大体の組成（名の下に切り刻み、修正する結果に至らざるをえないし、実際に至っていること。③平野三段階論を、資本＝賃労働関係を価値関係と見るところの、ブルジョアイデオロギーに屈服した、価値論による原理論の構築として、マルクス「資本論」を修正し、更にこの原理論の枠内に帝国主義段階論をうんぬんメルクス・レーニン主義を修正したものなのであり、宇野三段階論を認めること自身がそもそも誤っていること。まして、宇野三段階論から類推して革命理論について考えようとする革マル派の反動性は明らかであること。革マル派は宇野三段階論を認め、宇野学派のマルクス・レーニン主義に対する批判（例えば、筑辺賓「レーニンの農業理論」）を黒田哲学と折衷させつつとり入れることによってマルクス・レーニン主義を修正し歪曲していることは等々である。

革命理論＝政治理論の領域はかりではなく、哲学批判、経済学批判、その他すべての分野において、マルクス・レーニン主義の発展はそれに対して根本的に敵対的なものであり、あるいはマルクス・レーニン主義の名前をかぶった様々の修正主義との闘争を経て、たたかいとられてきた。その発展は国際共産主義運動の血のにじむような経験の中で勝ちとられてきたものである。

スターリンは「レーニン主義は帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である」（「レーニン主義の基礎」）と規定しているとおりレーニン主義の教科書を作ろうとすることによって、マルクス・レーニン主義を修正したが、革マル派はスターリン以下のスコラ学を唱えることによって、マルクス・レーニン主義を全く駄目にし、修正しているのである。このような革命理論の形而上学化の試みに対しては、それが形而上学であることを指摘しただけでは根底的な批判にはならず、革マル派がどのようにマルクス・レーニン主義の革命理論の内容を修正しているかを明らかにすることによって、はじめて根本的に粉砕できる。だから我々は次に彼等によるマルクス・世界革命論の修正の中味を検討していこう。

（注）ここまで述べてきたことからすでに明らかなように、第二次共産主義者同盟において、「理論戦線」八号日向論文「革命方法論」の早大社学同を中心とした部分の革マル派に対する理論的屈服を示すもの以外の何物でもなかった。

「赤軍」4号における塩見君の革命方法論なるものも、革マル派ブックスを示していた。九回大会以降の第二次ブンドの党内闘争において、日向論文で行われた、理戦八号論文の更なる改悪に対する我々の批判は「烽火」再刊1号及び「共産主義」14号で行われている。これらの中で、「烽火」再刊1号は、筑辺賓「レーニンの農業理論」を黒田哲学と折衷させつつとり入れることによって革マル派の反動性を暴露している。

（注）ここまで述べてきたことからすでに明らかなように、第二次共産主義者同盟において、「理論戦線」八号日向論文「革命方法論」の主体的立場の解明」は、当時の革マル派に対する理論的屈服を示すものであり、革マル派がどのようにマルクス・レーニン主義の革命理論の内容を修正しているかを明らかにすることによって、はじめて根本的に粉砕できる。だから我々は次に彼等によるマルクス・世界革命論の修正の中味を検討していこう。

革マル派はマルクス・エンゲルスの「世界革命論」について次の様に言っている。

「いうまでもなく、各国プロレタリア革命の永遠的完遂、その国際革命への連続的波及、という世界革命のこの有機的構造を、産業資本主義的段階の政治経済構造にふまえて本質論的に明らかにしようとしたのが、若きマルクス・エンゲルスであった。すなわち一方で『プルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上最初は民族的である。いずれの国のプロレタリアートも当然まず自国のプロレタリアートでなければならない。』（「共産党宣言」）というように、各国プロレタリア革命の民族的＝国際的な推進構造が彼らによって明らかにされた。それとともに他方では、資本主義の産業資本主義的段階の社会的現実にふまえ、――つまり一方における「プロレタリアの生産諸力の巨大な世界史的発展ならびに世界市場の形成、他方における世界史的普遍的な経済的存在としてのプロレタリアートの創造ということを物質的基礎とし――、その現実認識にもとずいて、実現されるべき世界革命の「一挙に、あるいは同時的に」という性格を、その「永遠的」完遂という性格を、その「現実的」性格を、「プロレタリアの自己解放」の「共産主義」の「実現」であるとして明らかにしたのであった。前者は各国革命のプロレタリアの主体的推進構造の解明であり、そして後者はプロレタリア世界革命の一環として、各国プロレタリアートの共産主義的実現」を唱え、「インターナショナルを主体的および実体的現実的な適用」との統一において、しかもインターナショナルを主体的および実体的根拠として、普遍的に実現すること、つまり各国革命の普遍的＝個別的実現――にほかならない。」（「日本の反スタ――リン主義運動Ⅱ」255～256P）

ここで、革マル派は、「共産党宣言」の「プルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。いずれの国のプロレタリアートも、当然まず自国のプロレタリアートでなければならない。」という箇所を、明らかに歪曲し、修正している。「各国革命の普遍的＝個別的実現」を唱え、「インターナショナルを主体的および実体的根拠」とすることを唱えてはいても革マル派は実際はインターナショナル＝世界党を神棚に祭り上げてしまっていることを言っている。世界党について語ろうとするなら、当然にもプロレタリア国際主義＝インターナショナリズムの内実が語られなくてはならないが、革マル派はいつ「プロレタリア階級の自己解放」という普遍的問題を、インターナショナリズムにもとずいて個別的に実現すること」と述べているだけである。インターナショナリズムという言葉のみを百遍繰り返しても、それだけでは何の免罪にもならない。

マルクスが「その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。」という箇所で、「共産党宣言」の他の箇所で具体的に明らかにされており、プロレタリアートの国際的利益、プロレタリアートの国際的統一は何かが具体的に述べられている。ところが革マル派はそれらの部分については何も触れずに「普遍本質論」を語っているのであり、プロレタリア国際主義の中味を抜いて言葉だけにすることによって、結局、最初は民族的」のみを強調し、民族共産主義に転落しているのである。革マル派の「普遍本質論」には彼らにとって都合の良いことなら、どんなテマでもつめこむことができるというわけである。普遍本質論に関するつじつまあわせは革マル派にまかせておけばよいが、このような子供だましの「哲学」で、プロレタリア国際主義を歪め、マルクス・レーニン主義を修正する試みは見逃すわけにはいかない。ちなみに、日本共産党もまた、第二次共産主義者同盟の世界同時革命論に対して「共産党宣言」の「最初は民族的」の箇所を引用して、「国社会主義論を難難して、日本共産党、革マル派のこのようなマルクス・レーニン主義の修正と闘争し革命的マルクス・レーニン主義の原則を復権させなくてはならない。

「共産党宣言」は次の様に述べている。

「プロレタリアートの生活条件はすでに破壊されている。プロレタリアは無所有である。彼の妻子にたいする関係には、ブルジョアの家族関係と共通するものはもはやなにもない。近代的工業労働、資本への近代的隷属は、イギリスでもフランスでも、またアメリカでもドイツでも、プロレタリアからすべての民族的な特徴をはぎとった。法、道徳、宗教は、プロレタリアにとっては、そのいずれも、背後にブルジョアの利益をかくしもったブルジョアの偏見である。」（国民文庫版「共産党宣言」41P）

とがなくなれば、それに応じて一民族が他の民族を搾取することもなくなる。

一民族の内部の階級対立がなくなれば、民族と民族とのあいだの敵対関係もまたなくなる。」（同52P～53P）

革命的マルクス・レーニン主義において、プロレタリア国際主義とはこのようなものであり、諸国のプロレタリアート及び革命党の具体的な政治態度として常に貫かれなくてはならない原則なのである。「共産主義者は、一方では、プロレタリアの種々の民族的な闘争において、全プロレタリアートの、共通の、国籍に左右されない利益を強調し、おしつらぬく。」（同44P）という、共産主義者＝革命党の任務が「共産党宣言」にははっきり述べられている。日本共産党や、革マル派が、「内容からではないが、その形式上、最初は民族的」という、一国のプロレタリア独裁権力の樹立について「宣言」で述べている箇所のみとりあげ、しかもその内容を歪曲し修正していることは明らかである。

日本共産党は正面切って一国社会主義論を唱えているが、革マル派はインターナショナルや、インタナショナリズムを口にしながらその中味を抜きさり、実際は一国から世界への波及として革命を考え、民族共産主義に転落しているのである。

革マル派はその民族共産主義をマルクス、エンゲルスの世界革命論の具体的な歪曲としても行っているので、この節の最後に触れておこう。彼らは「共産主義者」19＝20号で次のように言っている。

「マルクス・エンゲルスの世界革命論は、大きくいって『ドイツ・イデオロギー』に於いて転開されている、いうところの「同時革命論」と『中央委員会へのよびかけ』で提起されているいわゆる「波及・逆流論」との二つによって代表される。前者は世界革命を本質的に解明したものであり、後者は世界革命を現実論的に解明したものであり、この両者を『統一』してわれわれは今日、マルクス世界革命論というようによんでいるわけである。」（「共産主義者」十九＝二十号211P）

「ここで（「ドイツ・イデオロギー」をさす……引用者）『一挙に』とか『同時に』とかいわれている場合、第一には各国革命の完遂の論理をあくまでも前提としてそういわれているのだということ、そして第二にはそれはたんなる『時間的』な意味ではなく、『論理的』なそれとしていわれているのだということが明確につかみとられねばならない」（同212P）

「なお『ドイツ・イデオロギー』の段階では世界革命は『共産主義革命』という概念でいわれているが、（……略……）『共産主義の原理』では『世界革命』というように言い改められている。また、この『世界革命』が、『時間的』な意味でいわれているのではないことが『原理』の表現から十分理解しうる（ドイツでは比較的かんまんに進まざるをえない、ということがのべられている）のである」（同2～2P）

「一挙に」「同時に」というのが各国革命の主体的推進構造で、「永遠的完遂」というのが世界革命の一環としての各国革命の存在論的構造であるという、先に述べた革マル派のお喋りが、はじめの引用部分では、世界革命の本質的解明と現実論的解明との「統一」として、かたちを変えて語られている。そして、その後の引用部分では「時間的」同時革命ではなく「論理的」同時革命であるという革マル派得意の反革命的主張が行なわれている。我々は、マルクス・エンゲルスは世界同時革命の主張を厳密に同じ日、月、年に世界革命が遂行されなければならないという意味で行なったのではなくある程度の時間的巾はあっても一つの連関の中でおこるという意味で同時におこらざるを得ず、また遂行しなくてはならないという意味で行なったと考えている（そしてこの主張は一九世紀前半の国際階級闘争の経験に対するマルクス・エンゲルスの総括の上に立っていた）。革マル派の「論理的」同時という主張が、そのような意味であるならそれはあたり前のことである。しかし、革マル派の主張はそのような意味で行なわれているのではなく、マルクス・エンゲルスが当時の階級闘争に対してどのような意味で同時革命の主張を行なったかについて曖昧にし、「波及・逆流論」を「世界革命の現実論的解明」とすることによって一国から世界への波及として各国革命は前進するのであり、日本プロレタリアートは日本から世界への革命の波及を展望して闘えばよいのだという、結局は日本共産党の一国社会主義論、反動的「自主独立」論と同質の主張を導くために行なわれているのである。だから、我々は「ドイツ・イデオロギー」「共産主義の原理」「共産主義者同盟中央委員会への呼びかけ」における、マルクス・エンゲルスの世界革命論を具体的に検討してみよう。

〈（注）ちなみに、「同時」というのは「同じ時間」ということであり、「時間的」同時という日本語は、「革マル派的に同じ革マル派」という日本語と同じくらいに意味が通らない。〉

「ドイツ・イデオロギー」には次のように述べられている。

「共産主義は、経験的には、主要な諸民族が『一挙に』かつ同時に遂行することによってのみ可能なのであり」（合同出版71P）

「共産主義の原理」では、

「一九問。この革命は、ただ一国だけでおこりうるだろうか？

答。いや、おこりえない。大工業は世界市場をつくりだして、すでに地球上のすべての人民、とりわけ文明国の人民をたがいにむすびつけているので、どこの国の人民も、よその国におこったことに依存している。さらに、大工業はブルジョアジーとプロレタリアートとを、すでに社会の二つの決定的な階級にし、またこの二つの階級のあいだの闘争を、現在の（世界の）おもな闘争にした。この点で大工業は、文明諸国における社会の発展を、すでに均等にしてしまっている。だから、共産主義革命は、けっしてただ一国だけのものでなく、すべての文明国で、いいかえると、すくなくとも、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツで、同時におこる革命となるであろう。この革命は、これらの国々で、どの国が他よりも発達した工業、より大きな富、また生産力のより大きな量をもつかにしたがって、急激に、あるいは緩慢に発展するであろう。だから、この革命を遂行するのは、ドイツではもっとも緩慢でもっとも困難であり、イギリスではもっとも急激でもっとも容易だろう。それは、世界の他の国々にも同じようにいちじるしい反作用をおよぼし、それらの国々のこれまでの発展様式をまったく一変させ、非常に促進させるだろう。それは一つの世界革命であり、したがって世界的な地盤でおこるだろう。」（国民文庫版「共産党宣言・共産主義の原理」94～95P）

これがマルクス・エンゲルスの世界同時革命論である。特に「共産主義の原理」で鮮明に述べられているが、この世界同時革命論は何よりも「この革命は、ただ一国だけでおこりうるだろうか？」という問に対して、「いや、おこりえない」と述べられているのであり「すくなくとも、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツで、同時におこる革命となるであろう」と述べられているのである。すなわち、マルクス・エンゲルスは産業革命以降十九世紀前半の、ヨーロッパ・アメリカにおける資本主義の発達それに伴うブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争の激化、なかんずくフランス＝ドイツ二月革命前夜の国際階級闘争の経験の総括の上に立って、革命が一国だけでおこりえず、「支配的諸民族」＝すくなくともイギリス、アメリカ、フランス、ドイツの「文明国」で同時に遂行されなくてはならないとした。なぜなら「大工業は、文明諸国における社会の発展を、すでに均等にしてしまっている」からであり、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争が、これらの「文明国」では本質的に同じ性格のものとして激化していたからである。

このマルクス・エンゲルスの世界同時革命論は、その後一八四九年一月一日付の新ライン新聞における「そこで、ヨーロッパの解放は、それが被抑圧民族の独立獲得のための蜂起であろうと、封建的絶対主義の転覆であろうと、フランスの労働者階級の勝利的蜂起に制約されているが、しかしどんなフランスの社会変革も必然的にイギリスのブルジョアジーに、グレート・ブリテンの工業的・商業的支配にぶつかって粉砕する。……そして古いイギリスは世界戦争によってのみ転覆される。」（マル・エン全集第六巻―45P）などとして、更に具体化されていくが、当時の彼等の経験の総括の中から生まれた、ヨーロッパ中心の世界革命論であることに変りはない。

〈（注）、革マル派は「共産主義者同盟への中央委員会の呼びかけ」で「波及・逆流論」が主張されているというが、もしあえて、「波及・逆流論」を指摘するなら、この一八四九年一月一日付新ライン新聞の主張である。だが、この場合、マルクスがフランスから波及してイギリスにぶつかるとしている主張と、「原理」での同時革命の主張とは何ら矛盾するものではない。同時革命論が、二月革命の敗北の総括、及び具体的な国際階級情勢の分析を踏まえて、（ただ、「イギリスでもっとも急激で容易」という考えは訂正されている）更に具体化されているのである。〉

マルクス・エンゲルスの世界革命論は、更にその後、ロシアツァーリズムの反革命の砦としての役割に対する指摘、アイルランド問題等々として発展していくが、ここでは述べない。問題なのは、以上の様に、マルクス・エンゲルスの世界同時革命論は、当時の具体的な国際階級闘争の経験の総括として主張されたことであり、革マル派の如き、普遍本質論といった理論一般ではないことである。我々が学ぶべきなのは、このようなマルクス・エンゲルスの革命理論＝政治理論に対する態度なのである。もし、革マル派が、「波及・逆流論」を主張するなら「世界革命の現実論的解明」をうんぬんするのではなく、具体的な現在の国際的な階級情勢の分析の中から主張するべきなのである。ところが一たび現実の国際階級闘争の地盤に帰ってくるや、この具体的な情勢の中には米帝国主義を中心とした帝国主義の国際反革命軍事体系とソ連社会帝国主義の武装反革命に対して、帝国主義諸国革命戦争派、中国共産党及び三大陸人民の民族解放戦争が対決しているという事実があるのであり、各国革命が相互に同心内的に拡大しているという事実はないのである。そこで、彼等は反帝反スタ戦略を唱えることによって、民族解放戦争を否定するという逆立ちをやってのける。というより、そもそもが反帝反スタ戦略の反動性を美化するために、革マル派の世界革命論（革命現実論）がでっち上げられたわけであり、その内実はプロレタリア国際主義を骨抜きにした、「波及」革命論＝一国社会主義論への屈服だったということである。

（注）レーニンは、「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」の中で、帝国主義の不均等発展を根拠にして、一国（帝国主義の弱い環）における革命の勝利の可能性を唱えた。レーニンはプロレタリア独裁の樹立という意味で述べたのであるが、スターリンは後にこのレーニンの主張を一国社会主義建設可能論として歪曲した。レーニンの主張についても、我々は一九二〇年代の国際階級闘争の地盤の上で行なわれたものとして、なかんずく、「ヨーロッパ合衆国」のスローガンの持つ偏向を訂正するものとして行われたものとして、具体的、歴史的に理解する必要がある。

第二次共産主義者同盟は、スタ・ブハ綱領における、帝国主義の不均等発展論からの一国における革命の勝利の可能性の主張について、逆に帝国主義の不均等発展を根拠にした危機の同時性を主張し世界同時革命を唱えた。だが、この主張はスターリン主義との国際的党派闘争の問題、民族解放戦争の占めている位置、世界単一のプロレタリア独裁に関する問題などについてはっきりさせておらず、帝国主義の不均等発展についても世界貿易について主に着目した結果資本輸出、国際独占体に関する分析が不充分であり、米帝国主義に対する過少評価におちいっており（この点は「共産主義」13号でかなり訂正されたが）、限界を持っている。我々は、現在、第二次共産主義者同盟の歴史的限界を克服する努力を続けながら、国際非合法党として自らをかたちづくろうとすることによって、第二次共産主義者同盟の世界同時革命の主張を継承発展させようとしているのである。

(4) プロレタリア独裁を階級闘争の目的とし過渡期階級闘争を否定する革マル派

革共同革マル派は、更にプロレタリア独裁に関するマルクス・レーニン主義の原則を修正し、歪曲している。彼等は次のように言っている。

「革命の目的は、『労働者階級の階級的組織化、ブルジョア国家の打倒、プロレタリアートによる権力奪取である。』」（「共産主義者」十九＝二十号二〇八P）

このように、革マル派は、プロレタリア独裁を階級闘争の目的としてしまっている。この点は反スタ左翼のすべてに共通する誤りであるが、革マル派の反動性はなかんずく次の点にある。

「プロレタリア革命の実現は直接にはブルジョア的私的所有の廃絶、支配階級として組織されたプロレタリアートの手中への、あるいは労働者国家への（生産手段の？）集中を物質的基礎とした価値法則の廃棄としてあらわれる。だがそれは同時に、私的＝階級的所有一般の根絶にもとずく一階級による他階級の一切の搾取と疎外の廃絶を、つまり、生産と所有との機械的分裂の根本的な止揚を基礎とする人間の人間的解放の実現としてあらわれる。これがプロレタリアート独裁の本質である。」（「現代における平和と革命」一七五P）

「過渡期社会の経済構造は当然にも旧社会の残滓をさまざまの形で残さざるを得ない。労働時間による社会的総労働の比例的配分と等量労働交換とを実現するための物質的諸前提を創造するプロレタリアート独裁の過渡期においては生産手段の労働者的国有と労働者による生産の直接的管理を物質的基礎とした計画経済および擬制的労賃制が不可避である。」（「日本の反スターリン主義運動」五五〇～五五一P）

すなわち、革共同革マル派によれば、階級闘争の目的はプロレタリアート独裁であり、プロレタリアート独裁の本質は、ブルジョア的私有財産の収奪にもとずいた価値法則の廃棄、生産と所有の分離の止揚による人間解放の実現だとされる。そして、過渡期社会においては計画経済と擬制的労賃制が不可避であり、労働時間による社会的総労働の比例的配分と等量労働交換とを実現するための物質的諸前提を創造するための準備と努力が行われなくてはならないというのである。このように革マル派は、プロレタリアート独裁権力の樹立までを階級闘争だと考えており、一たんプロレタリアート独裁権力が樹立された後の過渡期においては階級闘争を否定している。彼等にとっては、計画経済の内容のみが問題なのであって、ソ連共産党の如き、「利潤方式」の導入には反対だが、擬制的労賃制その他（「必要労働時間と剰余労働時間」の比率の明確化、生産諸部門間の比率の明確化などが言われている）の手段をとるならば、後は生産力の発達によって、社会的総労働の比例的配分、等量労働交換に到達できる（すなわち経済原則の実現＝共産主義社会の低い段階というわけだ）ということが主張されているのである。これはトロツキー・ブハーリンの過渡期論と宇野経済学の折衷であるが、全くの経済主義、生産力主義であり、実質上のプロレタリア独裁の否定に他ならない。

〈（注）前節の「共産主義者」十九＝二十号の引用部分で、革マル派は世界革命と共産主義革命を区別しているが、これはこのような革マル派の過渡期階級闘争の否定の結果である。すなわち、革マル派にとっては世界各国でプロ独が樹立されるまでが世界革命なのであり、以降の過渡期は共産主義革命なのである。もっともこんな珍論はさすがに彼等にあっても、おしなべて主張されているわけではない。〉

マルクスは「国際労働者協会一般規約」および「ゴータ綱領批判」で次のように言っている。

「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷属が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にあること、それゆえ労働者階級の経済的解放が大目的であって、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきものであること」（国際労働者協会一般規約）

「土地の貴族と資本の貴族は、つねにその政治的特権を、彼らの経済的独占を擁護し、永続させるために利用しているので、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務となっている。」（同）

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない。」（「ゴータ綱領批判」）

すでに我々が何度も繰り返し主張している如く、以上のようにマルクスは階級闘争の大目的を労働者階級の経済的解放であると規定しているのであり、プロレタリアートによるブルジョア国家権力の打倒も、プロレタリア独裁の樹立は、この大目的を果たすための手段であり、義務であるとしているのである。ところが、革マル派はプロレタリアート独裁を階級闘争の目的にしてしまい、更にプロレタリアート独裁の本質を「生産手段のブルジョアジーからの収奪とプロ独権力の下への集中を物質的基礎とした価値法則の廃棄」「生産と所有との分裂」の止揚を基礎とする人間の人間的解放の実現と唱えることによって、過渡期階級闘争を否定し、プロレタリア独裁権力が、労働者階級の経済的解放を実現するための手段であり、テコであることをも否定しているのである。革マル派のこの生産力主義、過渡期階級闘争の否定は、哲学とともに彼等の最も得意とする領域であって、この過渡期論によって「スターリン主義」規定を行うことによって、彼等の反帝反スタ戦略は基礎づけられている。逆に言えば彼等の反動性が最も具体化されているのが、この生産力主義で固まった過渡期論であり、プロレタリア独裁の実質上の否定であるので、以下若干詳しく批判していきたい。

（続く）

〈七面よりつづく〉

我々はこのマルクス主義の原則をしっかりとふまえ、共産主義と労働運動の結合に向けて、労働者階級の経済的解放のために、労働者階級を革命戦争に組織し、ブルジョア国家権力を破壊し、プロレタリア独裁を樹立するため、非合法軍事組織としての党を建設する。

「これまでこの大目的をめざすあらゆる努力は、それぞれの国における様々な労働部門のあいだに団結が欠けており、また異った国々の労働者階級のあいだに同盟の友愛的な紐帯がなかったために失敗におわった。」「労働者の解放は局地的な問題でも一国的な問題でもなく、近代社会の存在するあらゆる国々を包括し、その解決はもっとも先進的な諸国の実践的および理論的協力によらなければならない社会問題であること」（国際労働者協会一般規約）

我々は、このマルクス主義の階級闘争に対する原則をしっかりふまえ、中国共産党をはじめとする第三インタナショナル諸派との国際的党派闘争を通じて国際非合法党を建設し、我々は各国ブルジョアジーの独裁する民族国家に分断され隷従させられている労働者階級の国際的精神で結合し、単一の組織として結合し、世界戦争によって帝国主義を打倒し、世界社会＿＿を打倒し、世界プロレタリア独裁を樹立する。　以上

同志竹谷との通信

〈編集局注〉ここに、現在獄中にある竹谷同志と我々との通信の一部を公開するのは竹谷同志の最終陳述を掲載するにあたって（6面掲載）、主要に自供問題の総括の点で陳述を補足しておくためである。

竹谷同志の自供に関する自己批判は、一九七二年段階で一たん行なわれているが、一九七三年五月一一日付の我々からの彼への手紙は、この自己批判の不充分性及びそれに対する我々の批判と指導の不徹底性を総括し、我々からの総括を提起した上で、竹谷同志のあらためてこの自己批判を要求したものである。この手紙に対する竹谷同志の回答は、一九七三年五月一三日付の手紙及び一九七三年五月二〇日付の手紙で二回にわたって行なわれた。その後も彼の総括は様々なかたちで深化されているが、我々はこれら五月一三日付、五月二〇日付の彼の自己批判を承認し、以降彼に対する一定の処分を行なった上で一定の任務を委任し、討論を継続してきたものである。

これらの通信において明らかなように、我々は竹谷同志のみならず、この間いくつかあった自供問題の総括を組織総体の総括として遂行してきた。読者諸兄姉がこれらの通信を注意深く研究されることによって、革命的マルクス・レーニン主義に依拠し、党を非合法軍事組織として作り上げるという我々の事業がどのような困難を克服しつつ進んでいるかについて、いくばくか理解されるなら幸いである。

最終陳述にも見られるように、竹谷同志は見事に立ち直り、爆発物取締罰則第一条を適用しての求刑十年の重罪攻撃をはねのけ与えられた任務を革命的に遂行している。読者諸兄姉の竹谷同志への支援をお願いします。

手紙の宛先は
東京都葛飾区小菅一の三五の一
竹谷 俊一
です。

同志竹谷へ

73年5月11日

前略…………

貴兄の一年有余にわたる「獄中生活」はこの総括作業がほぼ軸になっています。われわれは、この一年有余の経験を、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊としての党中央の建設という実践の観点から総括しなければなりませんが、そうしたときに言えることは、貴兄の総括作業は多くの点で前進しているにもかかわらず、今なお不充分であることです。この点の中心問題は貴兄の「自供総括」における自己批判の不充分性及びそれに対するわれわれの批判と指導の不徹底性であり、以上の結果として君自身の組織的位置がいまだ曖昧になっている事だと思います。

貴兄の「自己批判」「自己総括」作業に対するわれわれの批判と指導の不徹底性、不充分性をわれわれは総括しておかなければなりませんが、不徹底性、不充分性は次の理由によっています。

第一次RGの実践の総括と点検の中からつくり出された12・18ブントの「三・六規律」は、当時並存させて持っていた六回大会規約の限界を克服し、止揚していく革命的精神を代表していますが、「党生活」の項において「獄中生活」の項がないように、この分野での第一次RGの実践と点検が蓄積されていません（実際、第一次RGメンバーの多くは、政治警察及び検察の攻撃に屈服した獄中メンバーの「自供」の結果、逮捕の契機がつくり出されたと思います）

そして、この切り捨て＝空白をRGの実践とは分離された形で「弾対」を存在させ補完していたと思います。これは、三・六規律における、後に連合赤軍に加入戦術を取るべきだと主張（プロ通8号磯論文参照）した旧神奈川「左派」のマリゲーラ組織観及びドブレ組織観（スタ組織観に屈服した個人主義的組織観）の影響＝獄中切り捨てをスタ組織観の残滓＝弾対専門部路線によって補なっていたということです。だから（特に東京での弾対活動において）この分野での分権主義的性格は色濃く残っていたのです。

党建設の第二段階の闘いにおける中央集権主義の組織思想の復権とその具体化によってはじめて、先述した三・六規律の限界を克服する事が可能になったと考えますが、この過程は徐々にではありますが確実に進んできました。しかし、この前進した地平にたって獄中メンバーに対する指導をスムーズに行なうためには、われわれはなおいくつかの試行錯誤を経なければならなかったのです。そしてその結果、貴兄の組織的位置を不鮮明にすることになっています。

党中央を構成する政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊の建設、強化及びその実践の問題として、中央集権主義の思想とその組織政策の運用の内に、従来の獄中活動―「弾対」活動をとらえ返していくことが要求されていることを、われわれは、この間貴兄に対しても何度か通信してきたのですが、この作業を遂行するためには、われわれはこの間、一定の全党的な討論と組織改組を行なわなくてはならなかったのです。

われわれは、貴兄に対する一年有余の「指導」の総括を踏まえた上で、貴兄に次のことを要求したいと思います。

貴兄からの最初の手紙であったと思いますが、貴兄は「自供」を「ともかく自己批判しなければならない」と述べましたが、「ともかく」ではなく、この間の総括作業を踏まえた上で「正式」の再「自己批判」を要求したいと考えます。われわれは、この作業を組織問題として扱い（現在までの自己批判、総括作業を十分に組織問題として考えられなかったのは、上記のわれわれの限界のもたらした結果でもあったのですから）、われわれの側からも、貴兄のこの間の「自供理由」及び自己批判に対しての総括と批判を提出したいと思います。…………

①ここで触れるのは自供総括を中心として、党建設の第一段階に関するものです。なぜなら自供問題は「チーム」の組織総括としても取り上げなければならず、この総括と点検抜きには、党活動を更に一歩推し進めていくことは困難だと考えているからであり、TC総括も含めて「党建設の第二段階」の為の糧としなければならないと考えているからです。この作業によって貴兄の位置と以降の方策を確定し、特定の任務と責任を委任したいと考えています。

②党建設の第一段階及び第二段階移行の総括は全党的な問題であり、「実践的に克服され、理論的に定式化されているので、とやかく言う必要はない」という問題ではなく、革命的マルクス・レーニン主義のもと、国際非合法党を組織し、国際的党派闘争を組織し、新たなインターナショナルの基盤を形成するという綱領、組織、戦術の総体にわれわれの課題を解決してゆく為に絶対不可欠であり、従来の組織活動の徹底的な具体的点検を抜きにして、経験の問題やなんらかの体系的政治主張に解消することは許されません。

〃非合法組織の問題は非合法組織が解決する〃のであって、われわれは問題を政治局＝軍事委員会RG＝政治軍隊を中枢とした非合法組織の秘密活動の基盤で討論し解決していくことができるように自らを鍛え上げなくてはなりません。そのためには、全党員は公明正大でなければならず、問題を具体的に分析し、原則的な組織態度にもとずくことが絶対不可欠であり、責任の分担をはっきりさせなければなりません。ここに言う原則的な組織態度とはマルクス・レーニン主義の党組織原則に忠実であることであり。「何をなすべきか」「一同志に与える手紙」「一歩前進、二歩後退」に具体化された中央集権主義の組織思想―プロレタリア独裁を射程に入れた革命党の組織原則のことであり、それは資本主義社会におけるプロレタリアートの経済的地位、階級闘争に対するマルクス主義の原則にその根拠を持っています。

③自供問題に関しては、(a)「確信があってやったことではないので、自分のことについて自供した」こと、(b)「もし彼らが『赤報』派として、私とともに行動していたならば、自分も含めて、彼らを同志として断固防衛し、完黙していた」（72・9・25付）ということ、の二点についての自己批判と総括を要請します。

このことは「党建設の第二段階」における「同盟の秘密」の基準として、組織総括を血肉化しなければならないということです。

もちろん、われわれは敵に手の内をあかしてやるつもりもなければ、どこかの獄中書簡の如く、検閲との予定調和を目的とするものでもありません。そこで少々手きびしくみえるかもしれませんが、君の書簡でみる「自供理由」と総括を批判、検証するというかたちで、チームの総括を展開し、原則的な意志統一の礎を獲ち取っていきたいと考えますので了承されたい。

取り上げるのは君の〃総括の第一段階〃とも言うべき昨年の手紙です。以下番号をうって、引用列挙しておきます。

イ「赤報の組織自体に対して行き詰まりを感じ、これからどうするのかという点で非常に不安を感じていたから」

ロ「赤報をやめようとか、転向しようなどという気持は全然なかったので、余計な事は決して言いませんでした」

ハ「結局、自分を現在の位置よりも低い位置において、将来の生活において両立させようと思ったからだと思います。というのは自分には〇〇の家の問題があって……」

ニ「RG内部の矛盾（前述の様な自分自身の問題を組織において解決されるような方法が取れなかったこと、金集め問題、赤報結成以前の組織内の相互不信……勢力争い、均衡政治に堕したこと、中央委に対する地方委の不信、それと相まって培われた自分自身の無政府主義的態度」

（以上書簡No.1）

ホ「組織活動する場合の経済的な基礎の問題……即ち行動範囲をせばめられ……総体とみれば、自分は盲目状態になっていたと思います。そういう自分の限界性が当時の組織の限界性として自分の目に反映したのだ……」

ヘ「結局、逮捕されることによって、自分の未熟さが明らかになったし、以前から持っていた矛盾（Br個人主義無政府主義etc）が全面開花して、自分をして自己分裂的な行動を取らせたと思います。…旧来のまだるっこいやり方を自分としては取りたくなかったし、サッサと決めてしまいたかったからです」

ト「僕は赤報とそれ以前のブントを区別して考えていたし、切り離していた結果として完黙をやぶる結果になったのだと思います。もちろんこの考え方はまちがいだと思います」

チ「完黙をやぶったのも、〇〇を組織化することができなかったのも、それまで党内闘争―党派闘争をとおして、自己の思想を純化して行くことを怠っていたことが原因だと思います。……結論」

リ「マリゲーラ組織観に陥ったのは、やっぱり自分のBr個人主義＝無政府主義的なものが根底にあったと思います。それは赤報結成以後にも持ちこされそれが自供という形であらわになったのは残念ですが、それにはそれなりの理由があります。……弟や祖母をおばさんにまかせてほっぽり出すような形で出てきたことに最大の原因……」

ヌ「個人主義の基盤としての党活動における指導部の曖昧さがあると思います。……下部の脱走や地方委の脱落などはその端的なあらわれであって自分も少なからずその影響を受けたことは確実です」

ル「つかまって、このままでは少なくとも自分はやっていけない気がしたのです」

ヲ「自供することはどんな理由があれ、もはや許されないと思います。ブル法でさえも自供しなくても良いと述べているのですから」

④以上の手紙を取り上げたのは、これらの「自供理由」は自供の正しい総括であるとは思われないばかりではなく、貴兄の最近の手紙においても十分に克服されることなく残っていると考えるからです。

番号（No.1～No.6）をうっておいたのは、君の自供に対する「チーム」の考えを明らかにしようという意味であり、自供問題の総括は旧来の組織活動の全面的総括―貴兄の政治的態度、党組織に対する考え方を検証するための前提作業です。

もちろんこの自己批判問題を遅らせてきたこと、不徹底のまま時をすごさせてきたこと、そのために貴兄の位置と責任が不確定であったことはわれわれの責任です。

貴兄の「TCC総括」に関しても、貴兄の従来の党員（RG）としての位置を「低め」て「中程度の人々」の目から、地方主義の側から総括されているようなので、「RG内の地方主義の残滓」として批判しておきたい。

⑤列挙したイ～ヌは「自供理由」たりえません。このことを組織総括との関連で述べる場合に、党建設の第二段階にかちとられた自供問題に関する考えを述べてみたい。

すなわち共産主義党員にとって「自供」が「許されない」のは、資本家階級の階級意志であるブルジョア法が黙秘権を認めているからそうであるのではなく、(1)他メンバーの追求の材料を与え、(2)秘密活動を破壊する手がかりを与え(3)敵階級―政治警察がプロレタリアート人民に対し、非合法党への不信をあおりたてる材料を与え、(4)敵を勇気づける利敵行為であるからであり、ブルジョアジーとの政治的対決点が、合法党か非合法党か、帝国主義の侵略反革命戦争かプロレタリアート革命戦争（当面は遊撃戦）かとしてあるからです。（「爆取」問題は当時でも現在でも、彼我の攻防の中心問題の一つであること―武器の習熟、遊撃戦、秘密活動）

ところが、貴兄がプロレタリア人民（党に対する報告は同時にプロレタリア人民全体に対する報告であることに注意）にのたまうのは「自供」に関する心理的分析ばかり、これはどうしたことですか？（△△の政治警察の代弁の様な意見陳述とはもちろん区別していますが）

我々が以上のようにとらえるのは、旧来の急進民主主義運動における「完黙の思想」、スタの「完黙の権利」（従来〃組織防衛〃ととらえてきたが、しかし問題となるのはどういう〃組織〃の〃防衛〃か？ 両者共、合法又は半合法組織であること、そして第二インターを持ち出すまでもなく、合法組織を防衛するために大目的が犠牲にされてきたことに注意）に対してわれわれが「完黙」を非合法党の防衛、敵の消滅、秘密活動の習熟、報告の義務として中央集権の義務に規定しているからです。

⑥貴兄の逮捕は、このことについての曖昧性（分権主義の残滓）に根拠をもった秘密活動の欠陥によるものであると「チーム」は考えています。すなわち政治警察は鳩沢等の自供にもとずき、未だ「三・六規律」を未克服であったわれわれの内から数名を奪い、旧神奈川左派（「三・六規律」そのまま）を解体させることに成功したことです。

しかし、〃柳の下にはRGはいない〃ことを政治警察は以降知らされなければならなかったのです。連赤以降、我々は攻撃の科学を防御の科学で補い、整然たる後退戦を組織することに成功した。「左派」再刊号が「頭でっかち」と批判したわれわれこそが、第二段階の党建設を推し進めており、旧神奈川「左派」が解体してしまったという事実こそ雄弁です。

「党に対する責任」ということを、赤報No.2以降、赤軍派諸個人の「総括」を批判するなかで、強調し、今も強調しているのは、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中枢とした党建設によるものであることです。すなわち、同盟がかつて学生運動、反政府運動、組合運動等の指導部として存在していた限りでは党に対する考え方は、それらの大衆組織に所属し、指導する個々の党員という分散的な考え方でした。これに対し、われわれは、中央集権主義の組織思想によって党中央に対する責任という組織態度を確立することができたのです。このことは党建設の第二段階が階級闘争の全ゆるあらわれを指導し、革命戦争に動員することを目的としていることからの帰結です。

⑦したがって、(a)、(b)の自己批判を第二段階の到達地平の上に立って要請するのは、自供は政治警察の攻撃に対し、党に対する責任とRGの指導性を放棄するものであり、自らの位置を放棄するものであること＝「自分のことのみ」自供したとしても利敵行為であるからです。

(b)については、「個人的ウラミ」の裏返しとして、同志ではないから防衛しないという図式になりますが、それと自供とは別問題であり、三・六規律第一七章「処罰はある種の政治責任であり……」及び「反革命に転じた場合を除いて絶えず党に復帰するべく、党を支持する層として、成熟度に応じた政治指導を行う」の精神が踏まえられるべきであり、(1)組織問題として解決すべき点、(2)党派闘争思想闘争の問題として考えるべき点として整理されなければならず「赤報」結成をカナメとする分派闘争の意義を隠蔽する節度を越えた「人道的」言明は敵を利するものであり、同盟（RG）の独自性階級性を曖昧にすると考えられるからです。

イ～ヌについての「チーム」の考えを述べておきます。すなわちイロ及び「確信」の問題が貴兄の政治的態度であり、イの内容が問題であり、その説明として書かれてある二（RG内部の矛盾）は政治組織路線の総括としてなすべきことであり、貴兄の政治的態度がハの点で敵につけこまれるスキを与えていると考えます。

この〃総括の第一段階〃でみる限り、貴兄は組織問題を哲学的に「実践―矛盾」論で考え、路線上の総括が抜けて、財政、家族問題を優先させ、個人の能力及び思想性の問題に「大きい位置」を与えています。

これは分派闘争の時点で地方主義に解体されたことが正しく総括されることなく未克服のままであったことによっていること、及び敵に対する屈服それ自身であり、旧神奈川「左派」の見解を批判し切っていないこと、急進民主主義の残滓によるものだと考えます（組織的には「赤報」No.1の意志統一の不充分性）。

イ～チに対して、「チーム」としては中央集権主義の思想を党内部だけで考え（ということはプロレタリア独裁の思想に対して曖昧な、まちがった把握があるいうとことでもあります）、革命戦争＝階級戦争という点で曖昧であり、戦術問題の一分野での立遅れを克服せんとする傾向があったこと―この「行きづまり」の問題の総括は、(1)この中央集権主義の組織思想に対する誤った考えを改め、(2)情報の集中と公開制、(3)秘密活動の業務を担う諸グループの建設（兵站一般ではなく）、地方委の総括、(4)秘密活動の習熟として、党活動を拡大し、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊の統率を保障した組織政策を具体化していくことだと考えます。

従って、これらのものと定期連絡の義務の軽視こそが「大きい位置」を占めなければならず、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊として党の中枢を建設し、秘密の機能の集中と運動の機能の分散という組織政策、秘密活動を改善していくためには指導の転換が要請されたこと、秘密活動の条件は具体的に分析すべき事項であり、その欠陥の克服は、当時では共同生

活の克服として提起されていたこと（このことの意味は先に述べました）です。

チームの残していた三・六規律における「軍の自給自足」という考え方は、上記の中央集権主義に対する誤った考え方（思想的には急進民主主義の残滓）によっています。

現在これは、党中央部の強化、秘密活動の習熟による党活動の拡大。そして、われわれと結合する人々をつくりだしていくこと、そこにおいて、責任の分担が明確にされなければならないことと考えています。

そして秘密活動の問題は、決して経験の問題に解消されてはならず、「金がなかったから」と敵の前に自己批判するのは、それ自体が屈服です。

財政問題は、貧民の場合「確信」論と関連していると思われる。具体的にみれば、個人の一定の基準（成員の厳選）を前提にして、個人の能力主義を改め、諸々の組織の建設、組織改組として問題がたてられるべきであることは明らかです。

問題となるのはどういう「組織活動」かであり、むしろオルグ活動、カンパ集め等を蔑視していたことが問題であると考えます。これらの個々の活動が手工業的であるから失敗したのではありえません。手工業性といえば、階級闘争全体の「成長の病」のことであり、それを個人の能力や思想性の枠にとじこめては、党の意識的役割りの軽視であると考えます。なぜなら、それらの問題は組織問題として取り上げなければならず「オルグの思想性」の枠にとじこめたり、「才庸の解決」といったことろで、現実には何も解決されません（チ参照）。この問題は、党員の党中央に対する責任の一分野として、報告の義務ある義務として取り上げて解決を果していくべき事項です。

貧民のTCC総括等で明らかになったのは、貧民が一時地方主義に解体され、それが克服されないまま遺棄自供に至っていることです。（これはその文通で明らかになっていることは再度繰り返しません）。このことは「プルジョア個人主義の矛盾」といった思想問題一般に解消されてはなりません（cf プロ人間の「倫理」・革命理論・「論叢」）。思想問題は具体的にとりあげるべきことです。それは建設の直接の原因についても同じです。――ここにおける秘密活動の初歩的ミスは、合法主義の残滓として自己批判すべきであり、「二月一〇日以降の政治警察の動きを把握していたら……」という以前の問題です。（1）

秘密活動の稚拙さを組織一般に求めて本問題にした筈明は避けられるべきであり、貧民の逮捕をも教訓化して行くことがわれわれの課題であったように、貧民もこの問題を技術を含めて正しく総括して周辺諸分を秘密活動に習熟させていくことが要であることを、情報の集中の問題に付加して述べておきます。

「行動範囲」（ホ）では「基礎」の問題がとりあげられていますが、これは「何をなすべきか」の否定ではないでしょうか。君はそこから「盲目状態」を引き出しています。

「チーム」の問題としては、以上に述べたことにより、政治局＝軍事委員会の統率が保障されず、具体的に地下活動の欠陥をまねいているのです。「狭い組織」すなわち職業革命の組織の統率、指導性を「狭め」ていたと考えます。

従って、中心的には八の問題です。これは党建設の第一段階における地方委の総括としてなすべきですが、二の三谷批判は総括組織線の総括として行なうべきこと（三谷除名決議参照）。われわれが三谷氏の脱走を「プレハノフ的脱走」と呼んでいるところの意味を一一歩前進・二歩後退」等から読みとって下さい）。ここに現われているものこそ貧民の党組織に対する考え方です。この段階では、貧民は「戦術のたちおくれ」に分派闘争の意義を求め、指導部批判（実は三谷批判）によって、脱走や地方主義を正当化する傾向にあったことを批判しておきます。このことはマリゲーラ組織論があったとしてあげられているのですが、国家に対する急進民主主義的態度（これは君の場合、TCCから受け継いだものです）を克服し、分派闘争、地方委総括の「中程度の人々」の目からではない総括を求めます。貧民は「TCC総括」で「党における思想的統一」と述べています。何に対する何によるのですか？　答えて下さい。

（家族問題については、われわれも支持し、連絡等の仕事を担えるよう政治的教育をすること。貧民の場合、われわれの立場を明確にした上で一定の協力が出来るであろうと考えます。秘密の厳守、金等々。貧民の撮影をまちます）

「確信」を汲みとるのは、あえて言えば正しい資本主義批判にもとづく党の思想だと思います。そして党の日常的業務の一つはこの思想を宣伝することです。

12・18ブントの「二派止揚」は決して「戦術の立ちおくれ」の克服の意味ではないと。戦術においては「党の武器」の二派の批判です（従って、〇〇等の言うがごとき理論的批判に終始したわけではない）。そして71年秋の戦術をめぐる分派闘争の中で、われわれは二派の敗北、地下活動の党的止揚を掲げたのであり、この分派闘争において、12・18路線の限界につまあたり、克服していったことです。

五月十一日

固い握手を！

同志竹谷より　73年5月13日

前略

(1)「自供」の総括、五月十一日付第一信受け取りました。……とく私が書いた手紙を跡づけて、「自供総括」の不徹底性が何であるかを指摘してあったので、自分にとって問題の所在がはっきりしました。すなわち連捕されて以来、私は自分のことについて、とくに「自供」問題をひきつけて総括しようとしていた。組織問題として「自供」を総括するとしながらもそうするのではなく、手紙で指摘されていたように、自分の思想性の問題および能力の問題にせばめるのは、旧神奈川「左派」のマリゲーラ組織観及びドブレ組織観に特徴的であり、逆合赤軍の「共産主義化」論なども、同じく組織総体の問題としてでなく、個々人の頭に「共産主義」の思想性を植えつけていけば、「共産主義的」な人間の集団としての「党」ができるかのように考えていることにおいて誤りであると思います。このように組織と個人を切り離して考えることはプルジョア思想であり国家に対する急進民主主義的思想と密接な関係があります。この急進民主主義的思考観は誤った資本主義批判に立脚しているのであり、鋼を克服するために正しいマルクスの資本主義批判を獲得し、従来から持ち越してきた急進民主主義的政治思度を克服しつつあると思います。

私は、いつも党中央を糾弾するのを中心問題としてとらえるとをいつも曖昧にしていました。だから、71年10月に至るまでもその分派闘争時において、地方主義に解体され、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊として建設することに曖昧であったし、いつも動揺し、かろうじて焼律や同志の説得や「義務感」などで組織活動を継続行してきたのです。党中央を政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊として建設するという組織観を貫徹するためには、どれほど徹裂な党派闘争が要請されていたのかは周知の事実です。現在の党建設の第二段階において、マルクス・レーニン主義の組織原則である中央集権主義を復権し、指導の中央集権化と責任の分散化、運動の機能の分散化と総括の機能の集中化を党活動全体を総括活動として位置づけ、政治路線と闘争し、プロレタリアートを労働者階級の組織的解放のための階級戦争＝遊撃戦争に組織していくことしかない。これは全く共産主義者の党にとって正しいことです。

③の自供問題に関して、(a)「確信がありてやったことではないので自分のことについて自供した」と私が述べたことについて、これは一つの自分の自供理由ですが、自供そのものを「確信がなかった」ということで合理化するものであり、誤っていると思います。私は自分の行為を合理化するものはなかったのですが、「手紙」でも言うように、自供は党に対する自分の行為を合理化するものであり、無意識的に「自供そのものを「確信がなかった」ということで合理化するものであり、誤っていると思います。私は自分の行為を合理化するものはなかったのですが、「手紙」でも言うように、自供は党に対する私が述べたことについて、これは一つの自分の自供理由ですが、自供そのものを「確信がなかった」ということで合理化するものであり、誤っていると思います。私は自分の行為を合理化するものはなかったのですが、「手紙」でも言うように、自供は党に対する私が述べたことについて、これは一つの自分の自供理由ですが、自供そのものを「確信がなかった」ということで合理化するものであり、誤っていると思います。私は自分の行為を合理化するものはなかったのですが、「手紙」でも言うように、自供は党に対する

責任とRGの指導性を放棄するものであり、自らの位置を放棄する責任とRGの指導性を放棄するものであること、敵階級に情報を与え、党に対する追求のための手段を与える利敵行為であること、また党に対するプロレタリアート国家に対する急進民主主義的思想と密接な関係があります。この急進民主主義的思考観は誤った資本主義批判に立脚しているのであり、党に対する責任を放棄したことであり、利敵行為なので自己批判します。つまり共産主義者としての最低の義務である敵に一切の情報を与えないという党的責任を放棄したことを自己批判します。

(b)もし彼らが「派閥」として私とともに行動していたならば、自分もきっと、彼らを同志として断固防衛し、完然していた」。こういうように私が述べたのは、事実（全部出し）とちがっており、自分の自供を合理化するものであったと考えています。実際は、他の人々の自供で動揺し、完然しだいなくなったということであり、それは敵への服従ですが、自己の組織的責任を放棄したということです。だから、言い訳以上のものではなく、上官個人に対して責任を持ち、革命全体に対して責任を持つのではない個人主義的組織観のあらわれであり、このことはむしろ自供当時は、意識されていたことは確かです。自分が手紙で心理的なことを書きつらねたのは、そういう自供時のことを再現したかったからであり、そのことによってそれを分析し、問題が何であったのかをはっきりさせたかったからです。それはある程度成功したと思います。そのことを組織問題として把握することについては、私があまりにも個人主義的組織観に染っていたと思います。塩見氏はプルジョアのエゴと区別して、プロレタリアのエゴを断固支持すると言ってますが、これは誤りであり、彼自身の誤った資本主義批判、個人主義的組織観の反映だと思います。プルジョアでもプロレタリアでも、プルジョア社会では個々人に関してみれば、エゴはエゴであってどちらもプルジョア的である。プロレタリアのエゴを支持すると言うといかにも階級的に見えるが、しかし塩見氏はプロレタリア個人のプルジョア的意識に揮発しているのであって、プロレタリアートは階級として行動するためには、他のプルジョア政党と区別された別個の政党に自分をも組織しなければならないという原則を否定しています。私は自分のいろんな「理由」によってエゴを通し、自供することによって階級敵を利し、党に対する責任を放棄したのです。前述のような言い訳を考え、述べることによって、「赤報」結成を中心とする分派闘争の意義を曖昧にし、「赤報」の独自性、階級性を曖昧にしたことによって敵を利したことを自己批判します。

×　×

ちょっと筆が進みません。三日以内に発信させようとしたのですこのまま出します。まちがっていると思います。

私はまだ「手紙」に関してわからないところが多くあります。私は結局自供することによって、自己の組織的位置を放棄してしまいました。党に対する責任を負わずにいくら「総括」しても個人主義的組織観にとらわれた「総括」しかできないのだと思います。

共産同（RG）は党建設の第二段階の中で、質的に変化しつつあると考えます。

追って「手紙」に対する意見を述べようと思います。

73・5・13　竹谷俊一

同志竹谷より　73年5月20日

前略

「自供問題の総括は旧来の組織活動の全面的総括」、私の「政治的態度、党組織に対する考え方を検証するための前提作業」です。

私は「自供」を思想一般、能力から総括し、組織問題として総括しようとしつつも、その問題の所在を適確に把握していませんでした。これは、O、△、×の各人も陥っていたし、いまも陥っていることのものであり、彼らが、それを正しく総括しようと考えれば、「自供」に対する自己批判、71年10月分派闘争時における各人のとった政治的立場の誤りを自己批判せざるをえないし、根源的にはプロレタリア独裁を認めるのか否かということろに行きつくと思います。口では「応革命派を自覚している人々はプロ独を認めますが、実際は、スターリン組織観、マリゲーラ、ドブレ組織観などに目をくらまされ、あるいは自分の召地根性を合理化して、革命的マルクス・レーニン主義の組織原則である中央集権主義を徹頭徹尾貫徹し、指導の中央集権化と責任の地方分散化を通して、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を職業革命家の軍事組織として確保し、プロレタリアートの自然発生的な階級闘争を全一体に融合し、彼らを賃金制度廃棄のための階級戦争＝革命戦争に動員し、たった今現在からプロ独を射程に入れ、プロ独を準備することなど思いもよらないのです。

私は「自供」することによって他メンバー達求の材料を与え、秘密活動を破壊する手がかりを与え、敵階級政治警察がプロレタリアート人民に対し、非合法党への不信を煽り立てる材料を与え、敵を勇気付けることによって利敵行為をしたこと、共産主義者として最低の義務を放棄し、党中央に対する責任を放棄し、RGとしての組織的位置及び組織的任務を放棄したことにあると思う。だから、イーチ①～④と延期遅滞の義務が「大きい位置」を占めねばならないのです。

財政問題は、中央集権主義党にとって大きな問題であり、組織政策全体の問題として解決されねばならない。これに私の場合、党的負担を私におしつけられる傾向があったので、私も何とかお自分個人で解決しようと思ったにちがいありません。そこから能力主義が発生し、「金がなかった」から、敵へ屈服してもしようがないんだという、非常に経験主義的なブルジョア思想に陥ったと思うのです。

僕は「チーム」の窮見に全面的に賛成です。TCCのもっと厳格な総括は、×氏の文献の理論的批判に大きな位置を与えねばならないと思います。我々、○○さんも同じような思想（もっとも×氏よりは革命的ですが）でもって革命戦争を主張しているし、また△△言はただ単に作動しなかったと

いうだけで、プラグマティックに革命戦争だということを否定し、闘争の意義をボカしているのです。政治警察は、必死の「過激派」追及の一方、他方でB級暴力を花火程度でちっともコワくはネェ」などとほざいていたのですが、△君の考え方はそれと全く同じであります。自分は遊撃戦争とか革命戦争とか言われてもあまりピンと来ませんでした。従来鈍いほうでそうなかもしれないが、感覚的にまずとられて、やってみてはなわち身体で感じて、やってとその意義を把握するというのがいままでのパターンだったので、そうかもしれません。だから経験主義的なところがあって、はじめから原則を貫徹するのではなく、試行錯誤を繰り返す中で、やっとその原則を獲得する感じだった。「自供」にしても、自分は政治警察の対応や状勢の変化に応じて態度を変えるプラグマティズムに陥っていたと考えているのです。その根源は私が確固とした革命的マルクス・レーニン主義の原則のもとに「党とともに生きる」という党に対する責任を生き生きと感じられなかったこと、党的責任を存分に党内外で対象化し、果したえかったことにあると思う。だから、イーチ①～④に関して、チームの指揮してあるべき組織の欠陥を把握していると考えます。

「チーム」の考えは、連続に、私および我々の党組織の欠陥を把握しており、正しいと思います。

実際、自分の総括の仕方は、組織と自分のことを切り離して考えもっぱら自分自身の思想性及び能力に重きを置いて考えていた。これは、だから、分派闘争時にマリゲーラ組織観に陥ったという、自分の急進民主主義の残滓だという のも当っています。それは、党建設の第一段階において、我々の党組織そのものが三・六規律の限界性の残滓をひびきすっており、政治局＝軍事委員会が中央集権的指導を徹底して貫徹しえなかったことにもよっています。自分では革命戦争＝階級戦争ということに対して疑問を持っていました。また遊撃戦争ということに関しても不信を感じていました。これは10月闘争の評価と関係すると思いますが、△言はただ単に作動しなかったと

僕は「確信」の問題は知識一般にはないと思います。党に対する責任という観点も、その党の内容をぬきにした元も子もなくなります。僕は自分の階級的位置を鮮明にしたうえで、資本主義批判とマルクス主義の諸原則をものにしつつあると思います。人はそれぞれに共産主義者になる道はちがっていると思いますが、僕の場合は、自分のこれまでの過去を総括し、現在の自己の立場を鮮明にしたうえでその「確信」を汲みとることができたということです。僕は権力に対する谷物的理解が多少あったと思うし、それらの欠点は、実際に権力の正体をみることによって、意識されなかったと思います。どんな状態になっても、敵に対して屈服することなく、あくまで闘争しつづけなければならないということです。僕の「自供」はそれらの思想的欠陥のあらわれでもあり、「確信」のなさは自己の位置がはっきりしなかったことでもあると思うし、それによって、党中央に対する責任を放棄したものもあると思います。……

73・5・20　竹谷俊一

で資本論学習会を開いている×氏がパンフレットなど出したので、彼らの理論的根拠について、その反スタ経済主義を根拠とした批判する必要があると思います。こういう理論はもはや歴史的役割をすでに終えたのであり、もはや反動的にならざるをえないのであって、革命闘争にとってむしろ有害であります。（cf 資本主義は非資本主義的ウクライナ」などには存立しえない）―これら資本主義の運動法則にまで高めることのバカバカしさ）。脱走や地方主義を正当化する傾向があったのは事実です。それは僕自身のアカの発想の結果であって、それを克服するには自分の正当な組織的見地に立っての総括からのみ可能であると思います。

しかし、脱走などに対する対応は、断固として彼らの誤りを批判するという観点から一貫して継続しています。

「党における思想的統一」とは71・4・28以降、フラク間での統合のためのまじめな討論などおこなわれていなかったのではないかということです。僕はあるいは他のメンバーも、12・18路線になしくずし的に順応していったし、その結果、TCCの理論的基礎を総括しえず、他方では、12・18路線の意義を曖昧にしかとらえていないということになっていたのだと思う。

家族問題に関しては何も特効薬はないと思います。時間が解決するにはちがいないのですが、基本的には弟に対するオルグだと思います。家には金ばそんなに残っていないと思うし、寝するに下宿で単純再生産をしているのだし、そう長いことつづかない。弟は浪人しています。気楽なもので、まだ東京の大学を受けるのだと思います。僕が昨年来、憎しみの問題を提起したら、若干感じるものがあったようです。……

「確信」の問題は知識一般にはないと思います。党に対する責任という観点も、その党の内容をぬきにした元も子もなくなります。僕は自分の階級的位置を鮮明にしたうえで、資本主義批判とマルクス主義の諸原則をものにしつつあ

共産主義14号　〈内容〉
■　わが同盟の立脚点について
■　宇野経済学批判（上）
榎原均

共産主義15号　〈内容〉
■　（主張）国際主義と非合法党
■　（特集）反革命マル派の理論的基礎
■　宇野経済学批判（中）榎原均

意見陳述

竹谷俊一

＜編集局注＞この意見陳述は、同志竹谷俊一が去る六月八日第回公判（於東京地裁）でおこなったものに対するいくつかの修正を我々から竹谷君に提案し、同君の了解を得た上で掲載するものです。

私は、この最終陳述において、共産同（RG）の一員として、思想的立場を明らかにし、本件の爆取適用という反革命弾圧に強く抗議し、「自供」に対する全プロレタリアートへの自己批判を提出し戦闘宣言としたいと思います。

まずはじめに、69年分派闘争以来の赤軍派、情況・叛旗派、日向派との党派闘争の総括である、我々の12・18路線における「スターリン主義の復権」としての内容、すなわち共産主義とは革命的実践であり、この実践の基準及び党派闘争の武器としての―現在の場合はブルジョア国家権力に対する批判の武器としての―資本主義批判の内容を明らかにしていきたい。

近代ブルジョア社会においては資本家階級と労働者階級の経済的利害は全く非和解的に対立しており、ここにこそ階級闘争の根拠がある。それにもかかわらず、資本家の番頭である経済学の教授は、両階級の利害が和解できるかのように文章をくだくだと並べたて、「公正な分配」「公正な賃金」を主張し、欧米の先進国並みの「福祉」を実現することによって、日本帝国主義が「経済大国」から「平和で豊かな福祉大国」へ転換することが、もっとも良い政策であるかのように述べている。これはプロレタリアを馬鹿にするものであり、彼の経済的地位を見失なわせるものである。他方では、「自称マルクス主義」学者たちは、それに対して、ろくに反論もできず（反論できないのは彼らのブルジョアイデオロギーへの屈服を証明しているのだが）「労働力が商品化」しているから問題なのだとか「産業予備軍が存在している」から反乱がおこるのだとか、「搾取するのが悪い」などと資本制生産過程の結果としての搾取を、その根底において解明できず、単純に資本制的生産様式を理解することによって労働者階級と資本家階級の階級対立の非和解性を曖昧なものにし、ブルジョア教授に事実上屈服することでブルジョア政府に追従し、左からの支柱となってプロレタリアをだましている。私はこれらの誤った革命闘争に有害な資本主義観に対して、我々がこれまで宇野経済学その他もろもろの資本主義批判の批判として獲得してきた、我々の資本主義批判でもって近代ブルジョア社会の真実の姿を解明したい。

一般的ブルジョア的理解にあっては、資本家階級と労働者階級は「自由」「平等」な対等の地位にあり、お互いの欲求を充足するために商品を売買することによって経済的利害を全うし合っていると考えられている。しかし、この考えはまちがいである。この考えは資本家と労働者が「自由」「平等」な立場で売買しあうという仮象をその本質として把握してしまっている点で誤っている。すなわち資本と賃労働の関係を商品交換関係である価値関係であるというふうに把握するのではなく、価値法則の貫徹のうちに、それが所有の労働からの分離を実現するものとして、言いかえれば、資本と賃労働との関係を価値関係としてではなく、資本関係として明らかにし資本家と労働者の契約はその形式として把握しなければならない。

マルクスは、資本家と労働者との売買関係に関して「労働者が売るものは、彼の労働力であって、彼は労働力の一時的な処分権を資本家に譲りわたすのである」と指摘し、そして労働力の価値と、資本家の指揮のもと、直接的生産過程において労働者の実現する労働量に関して、「労働力の価値はそれを維持または再生産するのに必要な労働量によって決定されるがしかしその労働力の使用は労働者の活動エネルギーと体力によって制限されるだけである。労働力の一日分または一週間分の価値が、その同じ力の一日分または一週間分の行使とは全く別物である」とし、そして労働者の一日の生活費が六時間の労働量に相当する場合には、資本家は十二時間働かせ、「したがって、労働者は自分の賃金つまり自分の労働力の価値を補充するのに必要な六時間を超過してもう六時間働かなければならないことになる。……資本家は毎日三シリング前払いして毎日六シリングふところに入れる。この六シリングのうち半分は新たに賃金として払い出されるが残りの半分は資本家がなんの対価も払わずに手に入れる剰余価値をなすことになる。資本と労働とのこの種の交換こそ、資本主義的生産つまり賃金制度の基礎であり、かつ労働者を労働者として、資本家を資本家として再生産するという結果をもたらさざるをえないものなのである」として、賃金制度の秘密を暴いている。何故、ブルジョア教授やその他の俗物たちの目には、資本家と労働者との売買は「自由」「平等」なものとしてうつるのであろうか。「第一、厳密に言うと労働の価値と価格という語は、無意味な言葉であるにもかかわらず労働力の価値または価格が労働そのものの価格または価値であるような外観をとる。第二、労働者の一日の労働のうち、支払われるのはその一部分だけで、他の部分は不払であるにもかかわらず、そしてその不払いまたは剰余の労働こそまさに剰余価値または利潤となる元本をなすものであるにもかかわらず、まるで総労働が支払いを受けた労働であるかのようにみえる」「賃金制度の基礎のうえでは不払い労働さえも支払い労働であるようにみえる」と、マルクスはその理由を述べている。

もっと詳細に「流通過程のなかで行なわれる準備的な過程すなわち、労働能力の売買に関して」みよう。

資本主義的生産を絶えざる流れにおいて考察するならば、「資本主義的生産過程は、資本家が一部は市場に持ち出し、一部は労働過程それ自体のなかに保持する価値または商品の資本への転化であるだけではなく、資本に転化したこれらの生産物は彼の生産物ではなくて労働者の生産物である。資本家は絶えず労働者に彼の生産物の一部分―必要生活手段―を労働と引き換えに売る。それは労働力のすなわち買い手自身の維持と増殖とのためである。そして、彼の生産物のもう一つの部分を、すなわち客体的労働条件を資本の自己増殖の手段として、資本として絶えず労働者に貸す。こうして労働者は彼の生産物を資本として再生産し、他方資本家は、労働者を賃金労働者として、したがって自分の労働の売り手として再生産する。単なる商品販売者同士の関係は、彼らが種々の使用価値に具体化された彼ら自身の労働を交換するということを含んでいる。資本主義的生産過程の結果としての労働能力の売買は、労働者が絶えず彼自身の生産物の一部分を彼の生きている労働と引き換えに買い戻さなければならない、ということを含んでいる。こうして単なる商品所有者どうしの関係は消えてなくなる。このような労働能力の不断の売買は、そしてまた労働者自身によって生産された商品が、彼の労働能力の買い手として絶えず彼の前に現われるということは、労働者のすなわち自分に対して独立化された対象的労働の維持および増殖の単なる手段としての生きている労働の資本のもとへの隷属を媒介する形態としてのみ現われるのである。これは、この生産様式に内在する媒介の状態であり、労働の買い手としての資本と労働の売り手としての労働者との関係の永久化である。とはいえ、この形態は労働の隷属化および生産条件所有者の側における労働所有のいっそう直接的な他の諸形態からは、ただ形態的に区別されるだけである。この形態は、この売買の媒介によって絶えず更新される現実の取引と恒久的な従属関係とを単なる貨幣関係としておおい隠すのである。この取引の諸条件が絶えず再生産されるだけではなくて、一方が買うために用いるもの、そして他方が売らなければならないものはこの過程の結果なのである。この売買関係の不断の更新は、ただ独自な従属関係の恒常性を媒介するだけであって、これに互いに平等に自由に相対する対等な商品所持者たちの間の取引であり、契約であるかのような欺瞞的な外観を与えるのである。この準備的な関係が、今ではそれ自身資本主義的生産のなかで生み出されるところの生きている労働に対する対象的な労働の支配の内在的な契機として現われるのである。

だから、次のような人々はどちらもまちがっているのである。一方の人々は、賃労働、資本への労働の売り渡し、したがってまた賃金生活者という形態を、資本主義的生産にとって外的なものとみなす。それは、資本主義的生産関係そのものによって絶えず繰り返し生産されるところの、この生産関係の本質的な媒介形態なのである他方の人々は、この表面的な関係のなかに資本関係のこの本質的な形態性、すなわちその外観のなかに、この関係を特徴づけると称する。」

以上のように、生産手段が資本家に独占され、労働者が生産手段を持っていないという経済的事実は、労働力が商品としてあらわれる根拠ばかりでなく、資本家に対する労働者の経済的隷従の根拠なのであって、労働力が商品として売買されるということは、この経済的隷従が実現される形式に他ならないのである。

「我々は、すでに資本の直接的生産過程を分析し、そこにおける資本家と労働者との関係が、労働者に対する資本の指揮、強制労働生産手段への労働者の従属として階級闘争の根拠を形づくっていることを明らかにしてきた。更に資本家と労働者との「商品交換関係」を分析し、所有の労働からの分離を資本制的生産様式の内的作用として明らかにし、『資本論』の次の内容を復権した。『本源的には、所有権は自己労働にもとずくかにみえた。少なくともかかる仮定がなされねばならなかった。けだし平等な権利を有する商品所有者たちだけが対立しあうのであって、他人の商品を取得する手段は自己商品の譲渡だけであり、しかも商品は労働によってのみ生産されうるものだからである。所有はいまや資本家の側では、他人の不払労働またはその生産物を取得する権利として、労働者の側では、自分自身の生産物を取得することの不可能性として現象する。所有と労働との分離が、外観的には、それらの同一性から生じた一法則の必然的結果となる。』」

「資本制的生産様式は、単に商品を生産するだけでなく、剰余価値を生産するだけでなく、資本家と労働者―資本関係をより拡大して再生産する。このことは生産手段を独占している資本家と地主に対して、労働者がまさに経済的に隷属しており（飢えの規律への服従）、この経済的隷属を根底として、労働者の全ゆる形態における服従、社会的悲惨、精神的堕落及び政治的従属が結果していることを証明する。そして資本家と労働者の非和解的な階級対立が増々拡大され、再生産されることを証明するのである。」

だから、結論としてまとめると次のようになる。「すなわち、賃金労働者は、ある時間を無報酬で資本家のために（したがってまた剰余価値にたかる資本家の伴食者たちのために）働くかぎりで、自分の生活のために働くことすなわち生きることを許されるのだということ、全資本主義的生産制度の中心問題は、労働日の延長または労働力の生産性の発展ないしその緊張の強化などによって、この無償労働を増大させることにあるということ、したがって賃労働制度は一つの奴隷制度であり、しかも労働者の受けとる支払いがより良くなるかより悪くなるかには無関係に、労働の社会的生産力の発展につれて増々荷酷なものになる奴隷制度であるということがそれである」（「ゴータ綱領批判」）「労働者階級は賃金奴隷であり、資本主義社会とは生産手段の所有者としての資本家階級が労働者階級を賃金奴隷として階級支配していることによって成立している社会であり、この二大階級の非和解的対立が絶えず拡大再生産され、富がますます少数の大資本家に集中され、『貧困、圧迫、隷属、堕落搾取の量が増大するが、また絶えず膨張していき、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、統合され、組織されていく労働者階級の反抗の増大』を結果し、資本家階級を打倒することすなわち収奪者を収奪する最後の鐘をならすことにむかう労働者階級の階級闘争の条件が不断に形成されている社会である」

（「赤報」一号）

近代ブルジョア社会における支配階級は資本家階級であり、その社会の寄生物たる国家権力は当然にも資本家階級の利用するところとなり、労働者階級を賃労働制のもとにしばりつけ、労働者階級の反抗を暴力的に粉砕するための階級支配の道具となっている。

「国家は、階級対立を抑制しておく必要から発生したものであるから、それは通常もっとも経済的に支配する階級の国家である。そして、この階級は、国家を媒介として政治的にも支配する階級となり、こうして被抑圧階級を抑圧し搾取するための新しい手段を獲得する」「階級対立のうちに動いてきたこれまでの社会は国家を必要とした。すなわち、その時々の搾取階級が、自分達の外的な生産条件を維持するため、したがって特に現存の生産様式によって与えられている抑圧諸条件（奴隷制、農奴制あるいは隷農制、賃労働制）の下に被搾取階級を暴力的におさえつけておくための組織を必要とした」（エンゲルス「反デューリング論」）

武装した人間の特殊な部隊、常備軍、警察、裁判所、監獄その他及び資本による賃労働の搾取を補助し、強化するものとしての官僚制度、総じてブルジョア国家は、資本家階級が労働者階級を抑圧するための暴力組織である。そして資本家階級の階級的意志は国家意志として、法として表現されるけれども、このブルジョア民主主義法体系は、資本制的生産様式を基礎とし、資本家＝資本の所有者、労働者＝労働力の所有者、地主＝土地の所有者というように、資本家と労働者との労働市場での契約関係を「自由」「平等」の関係とすることによって、実際の階級支配＝賃労働制を擁護し維持しようとするものとして存在しているのである。

そうであるならば、労働者階級の経済的解放、賃労働制の廃止、私有財産制の廃止に向けての戦術はどのようなものでなければならないのだろうか。これはプロレタリア革命の原則的な思想問題としても非常に重要な意義をもっている。

その前に、私は現在の革命戦争派の重要な思想闘争の環としてあるところの、階級闘争におけるマルクス主義の原則として、国際労働者協会一般規約の前文を、資本主義批判をふまえて復権し、つぎに述べたい。

「労働者階級の解放は、労働者階級自身によってたたかいとられなければならないこと、労働者階級解放のための闘争とは、階級特権と独占のための闘争ではなく、平等の権利義務とあらゆる階級支配の廃止とのための闘争を意味すること、

労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷従が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にあること、

それゆえに、労働者階級の経済的解放が大目的であって、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきものであること、

これまでこの大目的をめざすあらゆる努力は、それぞれの国における様々な労働部門のあいだに連帯性が欠けており、またことなった国々の労働者階級のあいだに同盟の友愛的紐帯がなかったために失敗におわったこと、

労働の解放は、局地的な問題でも一国的な問題でもなく、近代社会の存在するあらゆる国々を包括し、その解決はもっとも先進的な諸国の実践的および理論的協力によらなければならない社会問題であること」以上。

さて、日本やその他の帝国主義諸国においても、労働者階級の闘いは、「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷従が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にあること、それゆえに、労働者階級の経済的解放が大目的であって、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきものであること」というマルクス主義の階級闘争に対する原則に反して、社会民主主義者や社会帝国主義者のもとで、いわゆる「搾取に反対する」ところの経済闘争、生活防衛闘争、組合主義的闘争を目的とし、それに政治性を付与することによって満足し、社会改良に終始してしまっている。だから、私はマルクスの言葉を借りてこう批判しなければならない。

「以上、私は賃下げに対する労働者側の周期的な抵抗と賃上げを獲得しようとする彼らの周期的な企ては、賃金制度から切り離すことはできないものであり、労働が諸商品なみになり、したがって物価の一般的動きを規制する諸法則に支配されるという事実そのものからおこらざるをえないということを明らかにした」（「賃金、価格利潤」）。その上に立って、資本主義的生産の一般的傾向は賃金水準を低めるものであるが、「だからといって、労働者階級を資本の侵害に対する抵抗を断念し、自分たちの生活状態の一時的改善のために、そのときの機会をおおいに活用する企てを放棄すべきだなどと言っていることになるのであろうか？　もしそんなことをしたら彼らはみな一様に救いようのない敗残者の群れにおちてしまうのであろう。私はすでに、賃金水準のための彼らの闘争は賃金制度全体と不可分なできごとだということ賃上げをしようとする彼らの努力は百回のうち九九回までは一定の労働の価値を維持しようとする努力にすぎないこと、また彼らが自分たちの労働の価値について、資本家と論争せざるをえないのは、自分自身を商品として売らねばならないという彼らの状態から、もともと起ってくるのだということを明らかにしたと思う。もし資本との日常闘争で臆病にも屈服するならば、彼らはそもそももっと大きい運動をおこすなどとうていできなくなることはまちがいない。

それと同時にかつまた賃金制度にともなっている全般的隷属状態のことは全然別として、労働者階級はこれら日常闘争の究極の効果を過大視してはならない。自分たちは、諸々の結果と闘いはしているが、それらの結果の原因と闘っているのではないこと、一時おさえの薬を用いてはいるが、病根を直しているのではないことを彼らは忘れてはならないのである。したがって、彼らは一時の休みもない資本の侵略や市場の変化から絶えず発生してくるこれらの避けがたいゲリラ戦だけに頭を突っこんでしまってはならない。現在の制度は彼らにあらゆる困苦をおしつけるが、それと同時に、それが社会の経済的再建に必要な物質的諸条件と社会的諸形態をも生み出すものであることを彼らは理解すべきである。『公正な一日の労働に対して、公正な一日の賃金を！』という保守的なモットーの代わりに彼らはその旗に『賃金制度の廃止！』という革命的な合言葉を書き記すべきである」「労働組合は資本の侵害に対する抵抗の中核としては十分役に立つ。その力の使用に思慮分別を欠けば、それは部分的に失敗する。現存の諸結果に対するゲリラ戦に専念し、それと同時に現存の制度を変えようとはせず、その組織された力を労働者階級の最終的解放すなわち賃金制度の最終的廃止のための槓杆として使うことをしないならば、それは全面的に失敗する」（前掲書）

それゆえ、国際労働者協会のハーグ大会において追加された規約第七条a項を復権しなければならない。「有産階級の集合的な力に対する闘争において、プロレタリアートは有産階級によって作られた全ての古い政党に対立する別個

の政党に自分を組織することによってのみ階級として行動することができる。このようにプロレタリアートを一つの政党に組織することは、社会革命とその終局目標たる階級の廃止との勝利を確保するのに不可欠である。

すでに経済闘争によって達成された労働者階級勢力の団結は、また労働者階級の手中において、自己の搾取者の政治権力にたいする彼らの闘争の槓杆として、役だたなければならない。

土地の貴族と資本の貴族は、つねにその政治的特権を、彼らの経済的独占を擁護し永続させ労働を隷属させるために利用しているので、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務となっている」のである。第三インター崩壊後の国際階級闘争において、決して客観的状勢が成熟していないのではなくて、プロレタリアートの革命党、共産主義者党こそ立ち遅れているのである。現代の革命党は中央集権的な国際非合法党として革命的マルクス・レーニン主義復権の旗の下に建設されねばならない。

日本においては、戦争犯罪人天皇を「国民統合の象徴」として利用しながら、帝国主義の犯罪者たちが政治権力を握って悪虐非道の限りを尽している。過去一世紀にもわたって中国人民、朝鮮人民、東南アジア諸民族の人民、部落民沖縄人民およびプロレタリアート勤労被搾取大衆を抑圧し、収奪し殺害し、差別者と被差別者として分断支配、隷属させてきた日本帝国主義を打倒し、政治権力を獲得し、プロレタリアートの独裁権力を世界プロレタリア独裁のための世界革命戦争の機関として組織しぬくことは、プロレタリアートが自らを解放するためにも、その他被抑圧人民を解放するためにも、彼らの偉大な義務となっている。共産主義者同盟（RG）は私有財産制、賃労働制の廃止、労働者階級の経済的解放のために、革命戦争を国際戦争として組織し労働者階級を動員することによって、共産主義と労働運動を結合しつつ、帝国主義国家権力を暴力的に粉砕し、プロレタリア独裁を組織しぬく。現代資本主義社会においては暴力革命が不可避なこと、要するに資本家階級が労働者階級を搾取しているのは、その経済的地位が異っているからであり、生産手段の所有者たる資本家階級に対して自分の労働力以外には何も持たない労働者階級が、資本家階級に隷従していること、そして労働者階級によって自己の剰余労働を搾取されるのはこの経済的隷従の結果なのであり労働者は資本を増殖する限りで生きることを許されるということ、そして資本家階級は、国家権力を利用することによって賃労働制に対する労働者階級の反抗を抑圧しているのであり、それゆえ私有財産制度の廃止をめざす闘争はブルジョア国家を暴力的に粉砕し、プロレタリア階級独裁権力を樹立することによってしか前進しないのであり、それ以外の闘いは全て皆資本家階級に敗北するか、闘わずして屈服するものでしかないのである。

暴力は悪の実行者たる以外の革命的な役割を演じるということ、「暴力は新社会をはらんでいるあらゆる旧社会の助産婦である。」さらに、暴力は、それをもって社会的運動が自己を貫徹し、硬直し麻痺した政治的諸形態を粉砕する道具である。賃金奴隷としての労働者階級はブルジョア国家権力を暴力革命によって打倒しなければならないし、暴力革命によってしか打倒できない。労働者階級を支配階級に鍛え上げるということはまず何よりも労働者階級を武器に習熟させ、武装させるということである。「プロレタリア階級独裁の第一条件は、プロレタリアートの軍隊である」。階級闘争はすべて政治闘争であり、武装蜂起ー世界革命戦争に向って進まなくてはならない。これらの意味においてまた歴史的教訓から言っても、過去、共産主義の旗を掲げて闘われた武装闘争は全く正しいのでありこれからもますます単一の国際非合法党の下に労働者階級を統合し革命戦争に組織し、ブルジョア国家権力の破壊として階級闘争は闘われねばならない。

真のマルクス主義の国家学説が以上のようなものであるにもかかわらず、再びマルクスやレーニンを神たなに祭り上げ、ブルジョアイデオロギーに屈服した思想がまかり通っている。

「政権」と「国家」を分離して考え、労働者階級は資本家階級を「政府」から追放し、それを自らの手に握れば、「国家」を変革できるかのような考えがある。すなわち、選挙闘争によって労働者階級を組織し、議会において多数派を形成し、「国家権力をプロレタリアの都合のよいように左右する」ことが政権の打倒であり、社会の変革であるかのように考える。しかしこうした考え方は、国家をその階級的基礎から切り離し、階級対立に中立的な機関としてみている点で全く誤っている。

また、我々の組織からの脱走者である八木沢一派も国家を「政策の体系＝階級対立を緩和させるもの」ととらえ、その階級的性格を曖昧にし、国家をめぐって諸階級が闘争しているものと見ており、民主主義者の見地に陥っている。旧神奈川「左派」もまた、資本主義批判を「個人の立場」として神だなに祭りあげることによって、武装闘争を主張しつつも、国家権力を階級支配の道具とする点で曖昧であり、暴力装置一般としてしか考えず、武装闘争の政治路線を曖昧にし、敵の暴力に対して暴力を対置する力学主義、自然発生性への拝跪、急進民主主義者、個人主義者の立場に陥っている。

我々は、資本主義批判をしっかりとふまえ、ブルジョア国家権力を賃金奴隷制を維持し、労働者階級の闘争を抑圧するための暴力組織として暴露し、粉砕し、破壊しつくすこと、そしてプロレタリア独裁権力をうちたてるための武装闘争＝革命戦争を拡大、発展、持続させねばならない。

プロレタリア独裁の承認それは資本家と労働者の経済的利害が非和解的に対立していることの承認であり、ブルジョア国家権力を打倒してプロレタリア階級の独裁する国家権力を打ちたてなくてはならないことの承認である。資本家に労働者が経済的に隷属していること、この経済的隷属を打破することが労働者階級の解放であること、したがって資本制的生産様式がもたらす諸結果のひとつであるところの搾取に反対する労働者階級の闘争は一時おさえの薬の役割を果すのみで、そのものをなくすことは出来ないのであり、それゆえに搾取に反対する闘争の中から形成される労働者の組織は、搾取者の政治権力を破壊しプロレタリア独裁権力を樹立する槓杆として利用されねばならず、そのためには労働者階級は独自の政党に組織されねばならないこと、総じて国際労働者協会の思想的遺産の継承であるとともに階級闘争の歴史的教訓からみちびかれるのである。

「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷従があらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属と根底にあること、

それゆえ労働者階級の経済的解放が大目的であって、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきものであること」「土地の貴族と資本の貴族はつねにその政治的特権を彼らの経済的独占を擁護し、永続させ、労働を隷属させるために利用しているので、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務となっている」（国際労働者協会一般規約）我々はこの義務を果すために革命戦争を闘い、プロレタリア独裁を樹立しこれを手段としてブルジョア社会の基礎である賃金奴隷制を根底的に解体し、労働者階級の経済的解放のために共産主義革命をかちとらなければならない。

以上のように、私は労働者階級の経済的解放を目的とし、そのための手段として政治権力の獲得を義務として闘争を行なったし、行なってきていることを明らかにしてきた。労働者階級の政治権力の獲得はブルジョア国家権力の破壊すなわち革命戦争として行なわれなければならない。それは、資本家階級が労働者階級を経済的に従属させており、国家権力を階級支配の道具として利用しているからである。このことは資本主義批判を踏まえて明らかにした。

我々は、自らの実践に対して、権力の恫喝や弾圧によっても決してワクをはめたりはしない。自らの行動にワクをはめるようなことをすれば、労働者階級の階級的利害を裏切ることになるにちがいない。自らを労働者階級の政党であると称しながら、選挙党として議会における多数派形成によって政権を奪しようなどと宣伝している社会帝国主義＝日本共産党宮本派は、すでに資本家階級に闘わずして屈服している。彼らの役割は労働者階級の闘争を抑圧するための資本家の費用を安あがりにし、労働者階級の目をくらまし、資本主義の賃金奴隷制をちょっとばかり長びかせ、救い、共産主義者を弾圧することにある。武器を一たん持ちながら「武器をとらなければよかった」などと言って、自らの旗に武器を捨てることを書きつけるような政党が、どうして革命をできようか。せいぜいブルジョア政府に入閣して、卑屈にも資本家の番頭になるにすぎない。我々は日本共産党宮本派を労働者階級の敵としてはっきり暴露し、打倒する。

我々の闘争は具体的な情勢をふまえて考察されねばならない。

国際的な革命と反革命の衝突すなわちアメリカ帝国主義を中心とする国際的反革命軍事体系およびソ連社会帝国主義の武装反革命との対決の中で、日本帝国主義はアメリカ帝国主義と同盟し、ベトナム、インドシナにおける侵略・反革命戦争を支援し、自らも三菱独占資本を中心とする産軍複合体の形成、帝国主義軍隊＝自衛隊との結合、官僚機構との結合として、金融資本、軍隊、官僚の絡み合った新たな国家形態をアジアへの侵略反革命戦争体制として築き、労働者階級人民を一層搾取し、抑圧し収奪している。このような中で我々は帝国主義国階級闘争を革命戦争の側へ大きく転換させようとして闘ったのであり、マルクス・レーニン主義の革命的諸原則のもとに闘ったのである。

資本家階級は、71年の一連の闘争に対して、「極左暴力取締総本部」を設置して、商業新聞を用いて「爆弾闘争粉砕キャンペーン」をはった。まさに彼らは、我々の闘いに恐怖したのであり、彼らの私兵もまた恐怖で緊張し、眠られず、「正義の味方」であるはずの警察官が労働者階級、人民のものを盗んだり、武器の取り扱いを誤って子供を傷つけたり、人殺しさえする犯罪がますます増加した。私兵どもは、71年末は一晩中資本家の支配を守るために見張りをつづけたけれども、より多くの労働者階級の戦士たちが闘争に参加し労働者階級の経済的解放のための義務としてブルジョア国家権力を破壊することの革命的意義を学んだし、他の労働者階級に闘い方を普及し教えた。

我々の党内にはこれらの闘争に前後して、いわば解党派として権力に屈服した八木沢一派と組織日和見主義として連合赤軍に身売りし党を解体しようとした旧神奈川「左派」があらわれたが、我々は彼らの脱走にもかかわらず、共産主義者同盟（RG）として党名改称をかちとり、党を一層強化、純化して団結を打ち固めることができた。

以上のように、我々の闘争は全く正しい目的を持ち、一定の成果をかちとることができたし、正当な手段でもって行なわれたという点で正当な行為である。

武装した人間の特殊な部隊、帝国主義国家権力の先兵、帝国主義者の私兵としての政治警察は、我々や労働者階級の戦士たちの闘争に恐れをなし、階級的憎悪をむきだして、これ以上「騒ぎ」を大きくされること、「治安」を乱されること、労働者階級や勤労被搾取大衆があとからあとからブルジョア国家権力の破壊としての革命戦争に立ち上ってくることをおしとどめようとして、あらゆる機関を総動員し、「極左暴力取締総本部」を設置して革命戦争派を弾圧しにかかった。また商業新聞のありとあらゆるものを総動員して、革命戦争派を赤軍派、日共革命左派RG、アナーキスト、黒ヘルと分類し、我々がいかにも気が違っており、ほうっておいたら何をするかわからないというようにデマを書きたて、革命戦争派に対する不信感をあおり、労働者階級、勤労被搾取大衆との結合を分断しようとした。また「アパートローラー作戦」を展開することによって、我々を都市から追い出し、労働者階級、勤労被搾取大衆から孤立させしかも「正義の味方」警察という名の下に労働者階級、勤労被搾取大衆を積極的に国家権力の手先に仕立てあげようとして、手配写真や「過激派の見分け方」などのパンフレットなどをばらまいて密告まで奨励したのである。また裏切り者を弾圧のために積極的に利用し、我々の組織に対して「RGの存在しているのがそもそも悪い」という論理で実質的な組織破防法を適用している。

しかし、私はこう言わねばならない。「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷従があらゆる形の従属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にあること」、賃金奴隷制がつづくかぎり、ブルジョア国家権力が悪法を乱発し、闘う労働者階級を弾圧しようとも、共産主義の要求のための革命戦争および資本家階級の様々な犯罪行為に対する抵抗闘争はありとあらゆるところで後から後から起ってくること、このことは不可避である。ブルジョア社会の階級対立を緩和させようと努め、民主共和制の国家形態でこそ階級闘争の決着をつけるために最後まで闘われねばならないことを否定し、労働者階級を資本家階級が隷属させておくための「平和を！」ととなえることは、その人の主観的意図とは裏腹に全く歴史の流れにさからっているのだということを知らなければならない。

三菱銀行大森支店の行員は、金融資本家の手先となって、私を逮捕させるために積極的に協力し警察につきだした。このことは三菱独占資本をはじめとする資本家階級が、自分らの利害に危害を加えるような人間、労働者階級を隷属させ支配しておくための「平和」に危険を感じさせるような人間は積極的に国家権力によって「清掃」するという手口をまざまざと実行したということである。

政治警察および検事は、私に頻りに転向するようにせまった。お定まりの朝から晩までの「取調べ」にも全く資本家の手先として熱心に口説きおとそうと努めた。ある警察幹部は、私の身辺捜査の成果を利用して、両親が存在せず弟と祖母しかいないということにつけ込んで、「就職口をさがしてその保証人になってやろう」ともちかけ転向するようにせまった。彼はまた「私は前にも何人も就職を世話して保証人になってやった」などと言っている。このように権力を利用することによって人の思想を変えられるなどと考えるのは大まちがいである。そして、これはRG壊滅作戦の一環である。また、あるデカは私に「組織と個人とどちらが大事か」などともちかけ、ブルジョア個人主義を盛んに煽動した。労働者階級にとって唯一の武器は組織のみである。労働者階級は組織と個人を切り離して考えることはブルジョア思想であり、連合赤軍及び旧神奈川「左派」の組織問題に対する考え方、「共産主義化」論や党＝共産主義の母体論もこのようなサークル主義的、個人主義的組織観の裏返してある。

政治警察は、連合赤軍の「粛清」が明らかになると狂喜して私に屈服をせまった。それにはこう答えねばならない。㈠粛清を不可避の代償として闘われた連合赤軍の銃撃戦を支持する。それは労働者階級に対して革命戦争の不可避性を示し、革命戦争を担う前衛党があらゆる困難をのりこえて建設されなければならないことを教えた。粛清と銃撃戦とを切り離し、粛清を避ける種々の条件に関してあれこれ主張することは、結局、銃撃戦に対する敵対につながり、ブルジョア階級の利益に荷担するものである。㈡我々は、粛清を代償とせざるをえなかった連合赤軍の党的破産に対し、人民戦争派の大人達の言葉を借りて、この現実を清算しようとしている赤軍派及び日共革命左派の党的解体を断固として批判する。㈢我々は、ブルジョア階級の革命戦争派に対するあらゆる敵対を打ち砕き、連合赤軍の党的破産を革命戦争の破産と考えている日共（宮本派）、革マル、日向派と断固として闘う」。

政治警察は、いわゆる「関西の人間」はするく、私のような「東北の人間」は純朴だから、彼らに利用されているのだというような子供だましの論理を使ったり、あるいは八木沢一派などを「りこうだ」とほめたたえ、「彼らに従ったほうが良かったのだ」などと日和見主義者への屈服をせまった。このような言動は71年秋の分派闘争の意義を全プロレタリアートにつつみ隠し、共産主義者同盟（RG）結成の意義をおおい隠すものであるから断固粉砕する。

政治警察ー検察は、裏切り分子を利用して、我々を援助していると思われる人々や、我々に結びついていると思われる人々を弾圧している。その一人であるF氏は、去る五月二日に地裁において、懲役八カ月、執行猶予二年として、犯人隠避で有罪判決を下された。こういう根も葉もないデッチ上げ弾圧を私は怒りをもって弾劾したい。

私は、ここで私の個人主義的組織観の未克服によって、政治警察に屈服し「自供」することによって、共産主義者としての最低の義務を放棄したことを全労働者階級勤労被搾取大衆に対して自己批判する。現在のブルジョアジーとの政治的対決点が合法党か非合法党か、帝国主義侵略反革命戦争か革命戦争かとしてある時に、「自供」することは秘密活動を破壊する手がかりを与え、敵を勇気ずけ、それによって敵を利することになる。これは党に対する責任の放棄であり、RGとしての組織的任務を放棄したことであり、だから私は全プロレタリアートに対して自己批判するのです。

権力は、私に対して爆取法をかけてきたのだが、これは私のみならず組織全体に対する及び革命戦争派全体に対する弾圧であると考えています。爆取法は明治以来日本の革命運動に対して適用され、多くの革命家、先進的労働者階級・人民の血を吸ってきました。その悪法が現在の「民主的」な「平和的」な憲法のもとでも生きのびており、ますますその効果を発揮し、闘うプロレタリアートを弾圧しているということは、この社会がいかなる社会なのか、そして何のために誰がその利益を受けるのかをはっきり示しているではないか。このような悪質な弾圧法を我々は粉砕するし、闘争の中で粉砕していきたい。

本件に対して爆取法を適用するのは、我々共産主義者同盟（RG）に対する弾圧のため以外の何ものでもない。検事は起訴状において、我々の闘争目的が「治安を妨げかつ人の身体、財産を害する」ことであると述べているが、このことは何ら証明されていない。ただ単に爆取一条を適用したいという一念で、爆発不能であり、何ら実害を及ぼしえないものに対して「科学」検査所のインチキ鑑定でもってこじつけをやっている。爆発物でないのに爆発物であるとこじつけたいのは彼らの階級的本能によって、プロレタリアートが武器を持つことを恐れているからである。私はこれらの権力の陰謀を断固粉砕するためにもまた革命戦争の前進と国際非合法党建設のためにもあくまで闘う。

総じて、帝国主義者の手先政治警察をはじめとする国家権力の弾圧は多方面にわたり、革命戦争の発展、拡大、深化を死ぬほど恐れており、その中核部隊としての我々に対して実質的な組織破防法を適用しているということは、資本家階級が「もうこれ以上社会の支配階級としてとどまりえず、自分の階級の生存条件を規制的法則として社会に押しつけえないということである。彼らには支配する能力がない」「社会はもはやブルジョアジーのもとで生きてゆくことができない。すなわち、ブルジョアジーの生存はもはや社会とあいいれないのである」（マルクス「共産党宣言」）ということを示しているのである。

「有産階級の集合的な力に対する闘争において、プロレタリアートは有産階級によって作られた全ての古い政党に対立する別個の政党に自分を組織することによってのみ、階級として行動することができる。

このようにプロレタリアートを一つの政党に組織することは、社会革命とその終局目標たる階級の廃止との勝利を確保するのに不可欠である。」「土地の貴族と資本の貴族は、つねにその政治的特権を彼らの経済的独占を擁護し永続させ労働を隷属させるために利用しているので、政治権力の獲得はプロレタリアートの偉大な義務になっている」（国際労働者協会一般規約）。

＜三面十段へつづく＞

7・20日航機H・J闘争とアラブ赤軍に対する我々の態度

一九七三年八月一九日　共産主義者同盟（BG）中央委員会

[1]パレスチナ解放戦争を闘っている国際義勇軍への最初の日本人戦士の参加として記憶されている氏が、テルアビブ・リッダ空港奇襲作戦以降一年有余、戦士九階修が参加して、第二の戦闘が行われた。

七・二〇日航機ハイジャック闘争の目的は、第一にリッダ空港奇襲作戦に敵対し、イスラエルに三十九億円の見舞金を支払った日本帝国主義者に対する報復であり、パレスチナ解放闘争に対する資金を、身代金として獲得することであった。第二は、長期にわたって拘留されている赤軍派の活動家二名の奪還を実現する事であった。

日本政府及び日航が、二つの要求を受け入れなかったために、日航機は爆破された。

イスラエルは直ちに反撃に出、八月十日、PFLP議長ハバシュ氏らが乗っていたリッダ空港へ運行し、PFLP幹部らを捕えようとした。このイスラエルの作戦は、ハバシュ氏らが、同機による旅行を中止したため、失敗に終った。

去る四月十一日、イスラエル特務機関によるベイルート在住PLO幹部暗殺事件によって頂点までのぼりつめたイスラエルのアラブゲリラ殲滅作戦は、しかしイスラエルの思惑通り、アラブゲリラの崩壊をもたらさなかった。根拠地を壊滅されたアラブゲリラは、西ヨーロッパに活動の舞台を求め、各国の革命政党との結合を深めつつ戦線を整えていたのであった。イスラエルは、アラブゲリラ殲滅を遂行すればするほどますます多くの国際義勇軍を生み出しイスラエルによるアラブへの侵略に反対する人々を、ますます多く作りだすであろう。

われわれは、米帝国主義者とイスラエル及びそれに加担している日本帝国主義に対決してパレスチナ解放のための闘争の一環として闘われた七・二〇日航機ハイジャック闘争を支持し、この国際義勇軍の戦闘を高く評価する。

[2]、日本帝国主義者と日本政府は、アラブゲリラが日航機をハイジャックしたことに動転し、商業新聞を通じて、今日のハイジャックが、目的のはっきりしない、無計画な、過激派の一揆的な行動にすぎないと宣伝し、他方、PLO等の「無関係」という声明を利用してパレスチナ解放戦争から孤立した小グループの行動として宣伝した。

だが、国際義勇軍（彼自身は「被占領地域の息子たち」と「赤軍」との共同作戦だと名乗っているが）は、日本政府が、自らの要求を拒否したとみるや、予定通り機体を爆破し作戦を完了させた。その後に及んで、日本政府は、人質になっている人々の家族たちが「政府、日航は何の対策もしなかったのではないか」という疑問と抗議に対し、それをそらすために脅迫状の存在を明かし、それが、イタズラか本物かを区別出来なかったということを言い訳として身代金支払に応じなかったことを合理化している。

日本政府と日航は、ハイジャッカーたちの手落ちとして、脅迫状が、予定日に届かなかったことを宣伝し、あたかも自分達が交渉に応じる用意があったかの如くふるまっている。

だが、日本政府が、要求されたと言う金額を用意したことが事実であったとしても、支払う意志は全くなかったのであり、乗客をきせぬ人質にするならしてみよ、とばかり、開きなおっていたのである。

このことは日本政府が彼らを「中立」が全くの欺瞞であることを暴露した。実際、日本帝国主義者は、リッダ空港奇襲作戦に敵対し、イスラエルに見舞金を支払った。日本帝国主義者は、パレスチナ解放闘争に敵対しつつ、アラブにおける石油等の資源の確保と、資本投下のために、このパレスチナ解放闘争に対する態度表明をさしひかえているにすぎない。実際ハイジャック闘争が一段落した後で日本政府は、関係アラブ諸国に使節団を派遣し、「経済・技術協力」という名のもとに侵略を更に押し進めようとしているのである。

[3]、「被占領地域の息子たち」と「赤軍」との共同作戦として展開された今回の事件に対し、商業新聞は、PLOや、アルファタ、PFLPなどが、「無関係」を声明したことによって、これを、孤立した組織による闘いであったとして宣伝している。

だが、イスラエル特務機関による、ゲリラ指導者に対するテロが強化されて以降、ゲリラは地下活動を強化しているのであり、またPLOや、アルファタ、PFLP幹部らが、自からの組織とは無関係であることを声明するのは、イスラエルの報復から身を守るためである。現に、イスラエルは、ゲリラの一つの作戦に対しては一つのテロによって反撃することを実行しており、今回も、PFLP議長ハバシュ氏を捕えようとしたのであった。

こうした条件のもとでは、むしろ独立の小グループが、秘かに準備することによってしか、作戦を成功させることはできないであろう。これが、パレスチナ解放闘争のゲリラ側の常識である。百歩ゆずって、今回の作戦が、アラブゲリラ内部における一定の党派闘争を前提として闘われたものであったとしても、今回の作戦が示した闘いの方向は、前進の方向であった。後退の方向ではなく、プロレタリア国際主義に接近するものであって、ブルジョアジーの攻撃は、むしろこの作戦が未熟ではあっても新たな闘いの方向の一つを示しているからこそ、意図的に行われているのである。

この闘争は、階級の革命戦争派と革命党間での戦術論定によって、パレスチナ解放闘争の世界の革命戦争派と結合して闘われることによって、パレスチナ解放闘争を前進させつつ、同時に諸国の革命戦争派をも強化していることを示した。またアラブ赤軍と結合した日本の兵士調査組織の存在をも示した。したがって日本の赤軍派とアラブ赤軍について分析しておく事が必要である。

四、日本赤軍派在チラブ支部、というよりは、今日では独立の分派に成長していると言ってよい、アラブ赤軍と呼んだ方が正確であるが、彼らはどのような思想のもとに、今回の闘争の中心的役割をはたしたのであろうか。

PFLPとの共同作戦による昨年のリッダ空港襲撃闘争の後、アラブ赤軍は、自からの主張をテーゼとしてまとめている。（「序章」九号参照）

アラブ赤軍は、まず、現在の情勢を「世界史的な帝国主義者間の抗争の展開は、一方の軸に巨大な世界プロレタリア独裁の萌芽を形成し、現在、世界的規模による真に闘う部分の結合と世界革命戦争統一戦線が確実にその意識性をもって流動を開始している」と把握し、PFLPが主張し、一九七三年五月に開催した世界の革命戦争派の会議を高く評価しつつ、同時に、その欠点を「こうしたPFLPを軸とする、「世界革命戦線」構築の作業は、経験的な良質さから問題意識として発生しつつも未だ世界革命の組織路線として登場しえていないが故に、戦術的であり、「世界革命戦線」が単一の、世界党・世界革命軍という面を内包しきれているとはいえない」と指摘している。

こうした認識の上に立って、アラブ赤軍は、自己の組織的位置づけと共に闘い抜くために、これが最後の集会であることを願う。

闘いを経て雄弁によって、そして人民によって組織される赤軍建設に向けた政治集会こそが、党再建の第一歩となろう。我々はここに結集した同志がこのことを確認していること。……アラブ赤軍解し、こうした党的合法志向と訣別し、地下に自らを鍛え、共に戦ゲリラ闘争ことを心から願う。」

[5]、八木健彦を指導者とする赤軍派の一分派（都委員会、関西地方委員会を中心とするいわゆる「清算派」といわれている諸君）は、七三年春に、臨時総会を開き中央委員会を選出し、赤軍派「再建」へとのりだした。八月四日の政治集会では、この臨時総会の内容を宣伝し、彼等が「赤軍派再建」をなしうすし的にテッチ上げていくための場として彼らによって計画されたものであった。

彼らが、この集会に向け準備したパンフ、「赤軍派臨時総会報告集」は、赤軍派結成以来の活動の総括が述べられている。

そもそも日本赤軍派在チラブ支部の態度に至る経緯は、六九年六月、菅蘭峠での敗北の総括にその出発点があった。この大菅蘭峠の敗北の総括についてこの清算派＝都委員会派は、次のように整理している。「当時の我々の総括については、七〇年秋前段階蜂起＝国際根拠地、国際地下活動、蜂起の軍隊建設として明白にされているからである。」そして、この総括に対する批判を次のように述べている。「しかし我々の総括は逆に、自己がもっていた欠陥、弱点を、それ自体の党的敗北、破産をより徹底化し、拡大し純化し、全面化するものとなった」（パンフP八四）

赤軍派がかって掲げていた、世界党・世界赤軍＝世界革命戦争統一戦線は、今や、コスモポリタニズムだとして投げすてられ、その代りに「マルクス・レーニン主義万才！世界プロレタリア共産主義革命の旗の下、中国共産党、朝鮮労働党、ベトナム労働党と結束し国際共産党を闘い取ろう」というスローガンが掲げられた。

このスローガンの変更は、旧来の第一次赤軍派の基本的立脚点であった「赤軍」№四の主張が、「観念的な、半ば無政府主義的な共産主義」であり、「小ブルジョア戦闘左翼と融合する思想」であって、「革命的実践の核心をなす国際主義と権力問題に関して、一国主義路線の批判から出発しつつ階級支配の観点を厳保にすることによって、階級闘争の総括と階級支配の構造から特徴づけられる政治権力と諸潮流に対する実践的態度このような潮流」とプロレタリアートを組織し、どのような性格と任務をもつ権力を樹立するのか、それに向けてプロレタリアートを鍛えあげゆく要求と任務を打ちたてることが出来ず、抽象的世界主義と戦闘的民主主義を力学的に表明した思想である」と総括されたからである。

清算派＝都委員会派の諸君にとっては、「急進的コスモポリタニズムと戦闘的民族主義は、日本プロレタリアートの国際的任務に基づいた日本革命の戦略問題へと昇服」されたのであり、先のスローガンが新たにつけ加えられたのである。

だが、この都委員会派の諸君の総括は、第一次赤軍派及び、連合赤軍派の欠陥の克服ではなく、赤軍派が切り開いた階級闘争の地平からの後退＝矮小派と同様の民族共産主義への転落の第一歩にすぎない。

[4]都委員会派の諸君が、こうした見解に立たれたった秘機は、連合赤軍の崩壊＝統一戦線の崩壊にあった。彼らは、連合赤軍の崩壊を「同志殺し」ととらえ、こうした「反革命」を赤軍派が生みだしたことを「自己批判」し、その結果今日の立場に到達したのである。彼等の総括の根本的欠陥は、革命戦争の発展原則をふまえず、組織に対する中央集権主義の思想を具体化することが出来なかったことにあるのである。我々が、基本組織＝綜合細胞というスターリン党組織観を克服することとして主張し、遂行している政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核とする党建設こそ連合赤軍が闘いとった階級闘争の地平を守り、更に前進するための最低の条件なのである。

赤軍派の獄中メンバーの多くの人々や、その他の分派はこの都委員会派の見解に反対している。都委員会派が、数の上では赤軍派の最大の分派であることは事実であっても、彼等が決して歴史を偽造することはできないであろう。

セ・二〇日航ハイジャック闘争こそは、この都委員会派の路線が過去の赤軍派の止揚や克服ではなく無政府主義的な共産主義」であり、「小ブルジョア戦闘左翼と融合する思想」であり、「コスモポリタニズム」である。今日のアラブ赤軍の中にも、こうした傾向は残されている。

だが、過去の赤軍派に対する百薬の上での批判的批判をどのように行なったとしても、都委員会派の諸君がレーニン主義だということにはならない。赤軍派は現在、自らの過去を歴史的必然性をもったもの、階級闘争の一時代の反映として具体的に、真剣に総括することが問われているのであって、都委員会派の諸君の総括は、批判的批判を、理論の次元で、しかも抽象的に語ることによって、過去を清算しようとしているにすぎなかったのである。

たしかに、都委員会派の諸君の言うように第一次赤軍派の基本思想を表わした「赤軍」№4その主張はそれ自体としてとりあげて批判的に検討されるべきである。だが、すでに見たように、アラブ赤軍の路線は、旧来の第一次赤軍派の路線を踏襲しており、軍の統一から党の建設へとする連合主義である。われわれは、この路線の未来に「世界党建設」を展望することが欠けてあることをはっきりさせねばならない。

そもそも軍の統一から党建設へと進む路線は、ここ数年の階級闘争にその現実的基盤をもっており現実に武装闘争、革命戦争が闘われ、軍事組織の統一、戦線と、革命戦争を指導する単一の党が現実に存在しているということに基礎づけられている。

しかし、こうした現実に対し、軍の統一から党建設へという路線を、いわば階級闘争の自生的な発展方向としてではなく、党建設の路線として、体系化するならば、それは、解党主義を助長することになり党建設そのものを反古にするであろう。

アラブ赤軍の路線は、旧来の第一次赤軍派の路線を踏襲しており、軍の統一から党の建設へとする連合主義である。われわれは、この路線の未来に「世界党建設」を展望することが欠けてあることをはっきりさせねばならない。

そもそも軍の統一から党建設へと進む路線は、ここ数年の階級闘争にその現実的基盤をもっており現実に武装闘争、革命戦争が闘われ、軍事組織の統一、戦線と、革命戦争を指導する単一の党が現実に存在しているということに基礎づけられている。

しかし、こうした現実に対し、軍の統一から党建設へという路線を、いわば階級闘争の自生的な発展方向としてではなく、党建設の路線として、体系化するならば、それは、解党主義を助長することになり党建設そのものを反古にするであろう。

[6]、パレスチナ解放闘争は、アラブゲリラが日航機をハイジャックしたことに動転し、商業新聞を通じて、今日のハイジャックが、目的のはっきりしない、無計画な、過激派の一揆的な行動にすぎないと宣伝し、他方、PLO等の「無関係」という声明を利用してパレスチナ解放戦争から孤立した小グループの行動として宣伝した。

だが、国際義勇軍（彼自身は「被占領地域の息子たち」と「赤軍」との共同作戦だと名乗っているが）は、日本政府が、自らの要求を拒否したとみるや、予定通り機体を爆破し作戦を完了させた。その後に及んで、日本政府は、人質になっている人々の家族たちが「政府、日航は何の対策もしなかったのではないか」という疑問と抗議に対し、それをそらすために脅迫状の存在を明かし、それが、イタズラか本物かを区別出来なかったということを言い訳として身代金支払に応じなかったことを合理化している。

日本政府と日航は、ハイジャッカーたちの手落ちとして、脅迫状が、予定日に届かなかったことを宣伝し、あたかも自分達が交渉に応じる用意があったかの如くふるまっている。

だが、日本政府が、要求されたと言う金額を用意したことが事実であったとしても、支払う意志は全くなかったのであり、乗客をきせぬ人質にするならしてみよ、とばかり、開きなおっていたのである。

このことは日本政府が彼らを「中立」が全くの欺瞞であることを暴露した。実際、日本帝国主義者は、リッダ空港奇襲作戦に敵対し、イスラエルに見舞金を支払った。日本帝国主義者は、パレスチナ解放闘争に敵対しつつ、アラブにおける石油等の資源の確保と、資本投下のために、このパレスチナ解放闘争に対する態度表明をさしひかえているにすぎない。実際ハイジャック闘争が一段落した後で日本政府は、関係アラブ諸国に使節団を派遣し、「経済・技術協力」という名のもとに侵略を更に押し進めようとしているのである。

[3]、「被占領地域の息子たち」と「赤軍」との共同作戦として展開された今回の事件に対し、商業新聞は、PLOや、アルファタ、PFLPなどが、「無関係」を声明したことによって、これを、孤立した組織による闘いであったとして宣伝している。

だが、イスラエル特務機関による、ゲリラ指導者に対するテロが強化されて以降、ゲリラは地下活動を強化しているのであり、またPLOや、アルファタ、PFLP幹部らが、自からの組織とは無関係であることを声明するのは、イスラエルの報復から身を守るためである。現に、イスラエルは、ゲリラの一つの作戦に対しては一つのテロによって反撃することを実行しており、今回も、PFLP議長ハバシュ氏を捕えようとしたのであった。

こうした条件のもとでは、むしろ独立の小グループが、秘かに準備することによってしか、作戦を成功させることはできないであろう。これが、パレスチナ解放闘争のゲリラ側の常識である。百歩ゆずって、今回の作戦が、アラブゲリラ内部における一定の党派闘争を前提として闘われたものであったとしても、今回の作戦が示した闘いの方向は、前進の方向であった。後退の方向ではなく、プロレタリア国際主義に接近するものであって、ブルジョアジーの攻撃は、むしろこの作戦が未熟ではあっても新たな闘いの方向の一つを示しているからこそ、意図的に行われているのである。

この闘争は、階級の革命戦争派と革命党間での戦術論定によって、パレスチナ解放闘争の世界の革命戦争派と結合して闘われることによって、パレスチナ解放闘争を前進させつつ、同時に諸国の革命戦争派をも強化していることを示した。またアラブ赤軍と結合した日本の兵士調査組織の存在をも示した。したがって日本の赤軍派とアラブ赤軍について分析しておく事が必要である。

四、日本赤軍派在チラブ支部、というよりは、今日では独立の分派に成長していると言ってよい、アラブ赤軍と呼んだ方が正確であるが、彼らはどのような思想のもとに、今回の闘争の中心的役割をはたしたのであろうか。

PFLPとの共同作戦による昨年のリッダ空港襲撃闘争の後、アラブ赤軍は、自からの主張をテーゼとしてまとめている。（「序章」九号参照）

アラブ赤軍は、まず、現在の情勢を「世界史的な帝国主義者間の抗争の展開は、一方の軸に巨大な世界プロレタリア独裁の萌芽を形成し、現在、世界的規模による真に闘う部分の結合と世界革命戦争統一戦線が確実にその意識性をもって流動を開始している」と把握し、PFLPが主張し、一九七三年五月に開催した世界の革命戦争派の会議を高く評価しつつ、同時に、その欠点を「こうしたPFLPを軸とする、「世界革命戦線」構築の作業は、経験的な良質さから問題意識として発生しつつも未だ世界革命の組織路線として登場しえていないが故に、戦術的であり、「世界革命戦線」が単一の、世界党・世界革命軍という面を内包しきれているとはいえない」と指摘している。

こうした認識の上に立って、アラブ赤軍は、自己の組織的位置づけと共に闘い抜くために、これが最後の集会であることを願う。

闘いを経て雄弁によって、そして人民によって組織される赤軍建設に向けた政治集会こそが、党再建の第一歩となろう。我々はここに結集した同志がこのことを確認していること。……アラブ赤軍解し、こうした党的合法志向と訣別し、地下に自らを鍛え、共に戦ゲリラ闘争ことを心から願う。」

[5]、八木健彦を指導者とする赤軍派の一分派（都委員会、関西地方委員会を中心とするいわゆる「清算派」といわれている諸君）は、七三年春に、臨時総会を開き中央委員会を選出し、赤軍派「再建」へとのりだした。八月四日の政治集会では、この臨時総会の内容を宣伝し、彼等が「赤軍派再建」をなしうすし的にテッチ上げていくための場として彼らによって計画されたものであった。

彼らが、この集会に向け準備したパンフ、「赤軍派臨時総会報告集」は、赤軍派結成以来の活動の総括が述べられている。

そもそも日本赤軍派在チラブ支部の態度に至る経緯は、六九年六月、菅蘭峠での敗北の総括にその出発点があった。この大菅蘭峠の敗北の総括についてこの清算派＝都委員会派は、次のように整理している。「当時の我々の総括については、七〇年秋前段階蜂起＝国際根拠地、国際地下活動、蜂起の軍隊建設として明白にされているからである。」そして、この総括に対する批判を次のように述べている。「しかし我々の総括は逆に、自己がもっていた欠陥、弱点を、それ自体の党的敗北、破産をより徹底化し、拡大し純化し、全面化するものとなった」（パンフP八四）

赤軍派がかって掲げていた、世界党・世界赤軍＝世界革命戦争統一戦線は、今や、コスモポリタニズムだとして投げすてられ、その代りに「マルクス・レーニン主義万才！世界プロレタリア共産主義革命の旗の下、中国共産党、朝鮮労働党、ベトナム労働党と結束し国際共産党を闘い取ろう」というスローガンが掲げられた。

このスローガンの変更は、旧来の第一次赤軍派の基本的立脚点であった「赤軍」№四の主張が、「観念的な、半ば無政府主義的な共産主義」であり、「小ブルジョア戦闘左翼と融合する思想」であって、「革命的実践の核心をなす国際主義と権力問題に関して、一国主義路線の批判から出発しつつ階級支配の観点を厳保にすることによって、階級闘争の総括と階級支配の構造から特徴づけられる政治権力と諸潮流に対する実践的態度このような潮流」とプロレタリアートを組織し、どのような性格と任務をもつ権力を樹立するのか、それに向けてプロレタリアートを鍛えあげゆく要求と任務を打ちたてることが出来ず、抽象的世界主義と戦闘的民主主義を力学的に表明した思想である」と総括されたからである。

清算派＝都委員会派の諸君にとっては、「急進的コスモポリタニズムと戦闘的民族主義は、日本プロレタリアートの国際的任務に基づいた日本革命の戦略問題へと昇服」されたのであり、先のスローガンが新たにつけ加えられたのである。

この現実は、都委員会の総括が、この都委員会派の諸君の総括は、第一次赤軍派及び、連合赤軍の欠陥の克服ではなく、赤軍派が切り開いた階級闘争の地平からの後退＝矮小派と同様の民族共産主義への転落の第一歩にすぎない。

[4]都委員会派の諸君が、こうした見解に立たれたった秘機は、連合赤軍の崩壊＝統一戦線の崩壊にあった。彼らは、連合赤軍の崩壊を「同志殺し」ととらえ、こうした「反革命」を赤軍派が生みだしたことを「自己批判」し、その結果今日の立場に到達したのである。彼等の総括の根本的欠陥は、革命戦争の発展原則をふまえず、組織に対する中央集権主義の思想を具体化することが出来なかったことにあるのである。我々が、基本組織＝綜合細胞というスターリン党組織観を克服することとして主張し、遂行している政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核とする党建設こそ連合赤軍が闘いとった階級闘争の地平を守り、更に前進するための最低の条件なのである。

たしかに、都委員会派の諸君の言うように第一次赤軍派の基本思想を表わした「赤軍」№4その主張はそれ自体としてとりあげて批判的に検討されるべきである。だが、すでに見たように、アラブ赤軍の路線は、旧来の第一次赤軍派の路線を踏襲しており、軍の統一から党の建設へとする連合主義である。われわれは、この路線の未来に「世界党建設」を展望することが欠けてあることをはっきりさせねばならない。

そもそも軍の統一から党建設へと進む路線は、ここ数年の階級闘争にその現実的基盤をもっており現実に武装闘争、革命戦争が闘われ、軍事組織の統一、戦線と、革命戦争を指導する単一の党が現実に存在しているということに基礎づけられている。

しかし、こうした現実に対し、軍の統一から党建設へという路線を、いわば階級闘争の自生的な発展方向としてではなく、党建設の路線として、体系化するならば、それは、解党主義を助長することになり党建設そのものを反古にするであろう。

アラブ赤軍は、一方で、自からを、日本赤軍派を母体とする、日本赤軍派在チラブ支部と位置づけているのは、単に、母体たるべき日本赤軍派が、解体しているということにもとずくものではなく、アラブ赤軍自身の路線の帰結であった。

われわれは、アラブ赤軍の闘いを、貴重な闘いとして、高く評価し、その教訓に学びつつ彼らとは別の国際非合法党の路線の下に自らの闘いを進めてゆくであろう。

われわれは、現在の時点で、軍の統一から党建設へという路線をとらず、国際義勇軍の組織化を中心的任務と考えていないことは、われわれが、現段階での革命戦争は、諸党派の単独の軍隊によって闘われるべきであり、そして、各派の軍事協定の限度であって、軍の統一を安易に進めるべきではないと判断しているからである。

現時点の戦争は、党の危機を軍の統一によって「乗り切ろう」とした、国際共産党を、進めてゆくための統一戦線の唯一可能な形態であり、「党建設」を、進めてゆくための統一戦線の唯一可能な形態の提起である。

我々は連合赤軍結成に際しても、革命戦争派内部の党派闘争の意義を強調し、彼らの連合独裁論への傾斜を批判したが、アラブ赤軍の世界革命戦争派内部の党派闘争の意義、第三インターナショナル諸分派のスターリン主義への屈服に対する国際的党派闘争の意義を強調する。この国際的党派闘争の意義を強調する。この国際的党派闘争の意義を強調する。マルクス・レーニン主義を復権することによって初めて新たな世界党建設の道につながることができるのである。アラブ赤軍自身、日本の赤軍派＝清算派に対する、非合法組織、地下革命党の路線の不在を指摘しながら清算派に追随している塩見君に対しても）幻想をすてて断固として分派闘争を闘い、国際非合法党として自らをかたちづくることが問われている。我々の国際非合法党建設の路線の正しさは、いずれ階級闘争の進展によって明らかにされるであろう。